

若江遺跡第25次発掘調査報告

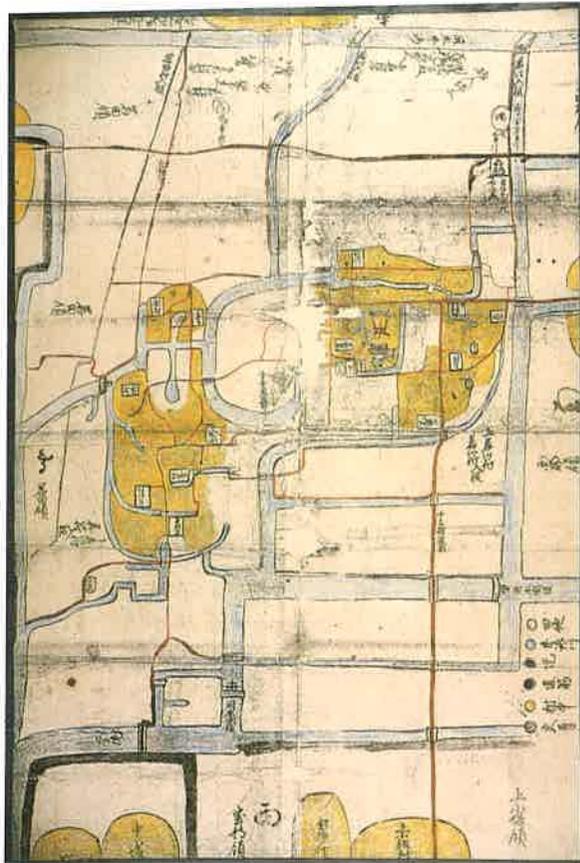
1987

財団法人 東大阪市文化財協会

若江遺跡第25次発掘調査報告

1987

財団法人 東大阪市文化財協会



若江 村絵図 (複写)

は し が き

府道大阪東大阪線の改良工事に伴って発掘調査が進められてきた若江遺跡は、室町時代、河内国の政治・軍事の中心的役割を果たしていた若江城を中核とする、弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡であります。本遺跡は、昭和47年の若江小学校校舎増築工事に伴う調査をはじめ、公共下水道管理設、住宅建設など種々の開発工事に伴う調査が幾度となくおこなわれてきました。

今回の調査では、若江城に伴う堀、溝および土壇などの遺構と、古墳時代から江戸時代に亘る多くの遺物を検出いたしました。中でも堀は、若江城の中心部を画する大堀の一部であり、多量の遺物も出土し、城の構造および当時の人々の生活を知るうえでの大きな成果を得ることができました。また地元の方々から絵図・研究資料など、貴重な資料の提供をいただき、若江城の位置・構造・性格を考える大きな手掛りを得ることができました。しかし、いまだ若江遺跡の一端を見たにすぎず、今後、発掘調査をはじめ文書などの史料調査を進め、その全貌の解明に努力していきたいと思います。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

昭和62年3月

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 木 寺 宏

例 言

1. 本書は、大阪府八尾土木事務所が進めている府道大阪東大阪線の改良工事に伴い発掘調査を実施した若江遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査および遺物整理は、財団法人東大阪市文化財協会が大阪府八尾土木事務所の委託を受け、現地調査は昭和58年3月4日から3月31日まで、遺物整理は昭和61年12月2日から昭和62年3月31日まで実施したものである。
3. 調査・整理は、次の事務局体制により進めた。
 - 理事長 秀平勇造（東大阪市教育委員会教育長）昭和58年12月まで
木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）昭和58年12月より
 - 事務局長 寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
 - 庶務部長 小川 満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）昭和58年4月まで
吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）昭和61年4月まで
下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）昭和61年12月より
 - 調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
 - 庶務部 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
 - 調査担当 吉村博恵（東大阪市教育委員会文化財課）
 - 調査補助 北尾耕三 石田憲一郎 丸山美由紀 見好理恵子 石井裕己 玉置泰嗣
森田佳世子 藤江直美 柳原万里 小出真規子 小寺久仁子 道上雅美
金弘美 山川素美 楠直子 酒本恵美子 吉田公代
4. 本書の執筆は IV-1・(2)を勝田邦夫（東大阪市教育委員会文化財課）、Vを安田博幸・井村由美、その他の項および編集は吉村がおこなった。
5. 図版に収めた遺構写真は吉村が撮影し、遺物撮影は木製品を新生堂フォト、その他の遺物をG・Fプロに委託した。
6. 航空写真（図版1）は、大阪市より提供を受けた。
7. Vの報文は、武庫川女子大学薬学部 安田博幸教授、井村由美助手より玉稿を賜った。記して謝意を表するものである。
8. IVの報文で使用した村絵図の閲覧および複写パネルの借用を許された飯田博一氏、若江地域の歴史研究をおこなわれていた故湯村平三氏の資料の借用を許された湯村正夫氏の御協力を記して感謝いたします。
9. 調査・報告書作成にあたっては、大阪教育大学 木村寿氏、新庄町教育委員会 吉村幾温氏、日本古城友の会 前田航二郎氏、東大阪市文化財保護委員 荻田昭次氏、東大阪市立上四条小学校 奈良英弘氏より御教授をいただき、法務局枚岡出張所、東大阪市中市税事務所課税課の方々に御協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。

本文目次

巻頭カラー図版

はしがき

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の概要	5
1. 層位	5
2. 遺構	7
3. 出土遺物	10
(1). 上部遺物包含層	12
(2). 堀埋土	12
(3). 堀堆積土	16
(4). 整地層	19
(5). 溝埋土	21
(6). 下部遺物包含層	24
IV. 絵図より見たる若江城	26
1. 飯田博一氏所蔵絵図	26
(1). 絵図の性格	26
(2). 絵図の製作年代	27
2. 絵図などからの城域復元の試み	28
(1). 城関連の遺構	28
(2). 若江地区の小字	30
(3). 城域などの復元	32
V. 若江遺跡出土の漆喰様物質の化学分析	37
VI. まとめ	40

挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図	2
第2図	遺跡周辺図	4
第3図	東壁断面図	6
第4図	堀・ピット平面実測図	8
第5図	溝平面実測図	9
第6図	上部遺物包含層・堀埋土内出土遺物実測図—土器—	13
第7図	堀埋土内出土遺物実測図—瓦—	14
第8図	堀埋土内出土遺物実測図—瓦・石製品—	15
第9図	堀堆積土内出土遺物実測図—土器—	16
第10図	堀堆積土内出土遺物実測図—瓦—	17
第11図	堀堆積土内出土遺物実測図—木製品—	18
第12図	整地層内出土遺物実測図—土器1—	20
第13図	整地層内出土遺物実測図—土器2—	21
第14図	整地層内出土遺物実測図—瓦・金属製品—	22
第15図	溝埋土内出土遺物実測図—土器—	23
第16図	溝埋土内出土遺物実測図—瓦—	24
第17図	下部遺物包含層内出土遺物実測図	25
第18図	若江・村絵図	(折り込み)
第19図	絵図の現地図への復元図	(折り込み)
第20図	発掘調査検出遺構図	29
第21図	若江地域小字図	(折り込み)
第22図	若江地域微高地区分図	33
第23図	若江城城域復元図	(折り込み)

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 若江遺跡周辺航空写真(昭和17年ごろ)
- 図版 2 遺構 若江遺跡周辺航空写真(近年)
- 図版 3 遺構 1. 調査作業風景
2. 堀埋土内遺物出土状況(1)
- 図版 4 遺構 1. 堀埋土内遺物出土状況(2)
2. 堀埋土内漆喰片・瓦出土状況
- 図版 5 遺構 1. 堀堆積土内遺物出土状況(全景東より)
2. 堀堆積土内遺物出土状況(部分1)
3. 堀堆積土内遺物出土状況(部分2)
- 図版 6 遺構 1. 堀堆積土内木製品出土状況(1)
2. 堀堆積土内木製品出土状況(2)
3. 堀堆積土内木製品出土状況(3)
- 図版 7 遺構 1. 堀(東より)
2. 堀(西より)
- 図版 8 遺構 1. 溝(東より)
2. 溝(西より)
3. 下部遺物包含層内土器出土状況
- 図版 9 遺構 1. 東断面
2. 東断面(部分)
- 図版10 遺物 1. 上部遺物包含層
2. 下部遺物包含層
3. 堀埋土(1)
- 図版11 遺物 1. 堀埋土(2)
2. 堀堆積土
- 図版12 遺物 1. 整地層(1)
2. 整地層(2)
- 図版13 遺物 1. 整地層(3)
2. 整地層(4)
- 図版14 遺物 1. 溝埋土(1)
2. 溝埋土(2)
- 図版15 遺物 土師器皿・磁器皿
- 図版16 遺物 土師器皿・瓦器皿・土師器

- 図版17 遺物 軒丸瓦
 図版18 遺物 軒平瓦・瓦製品・文字瓦・金属製品
 図版19 遺物 石製品・漆器椀・木製蓋
 図版20 遺物 木製品

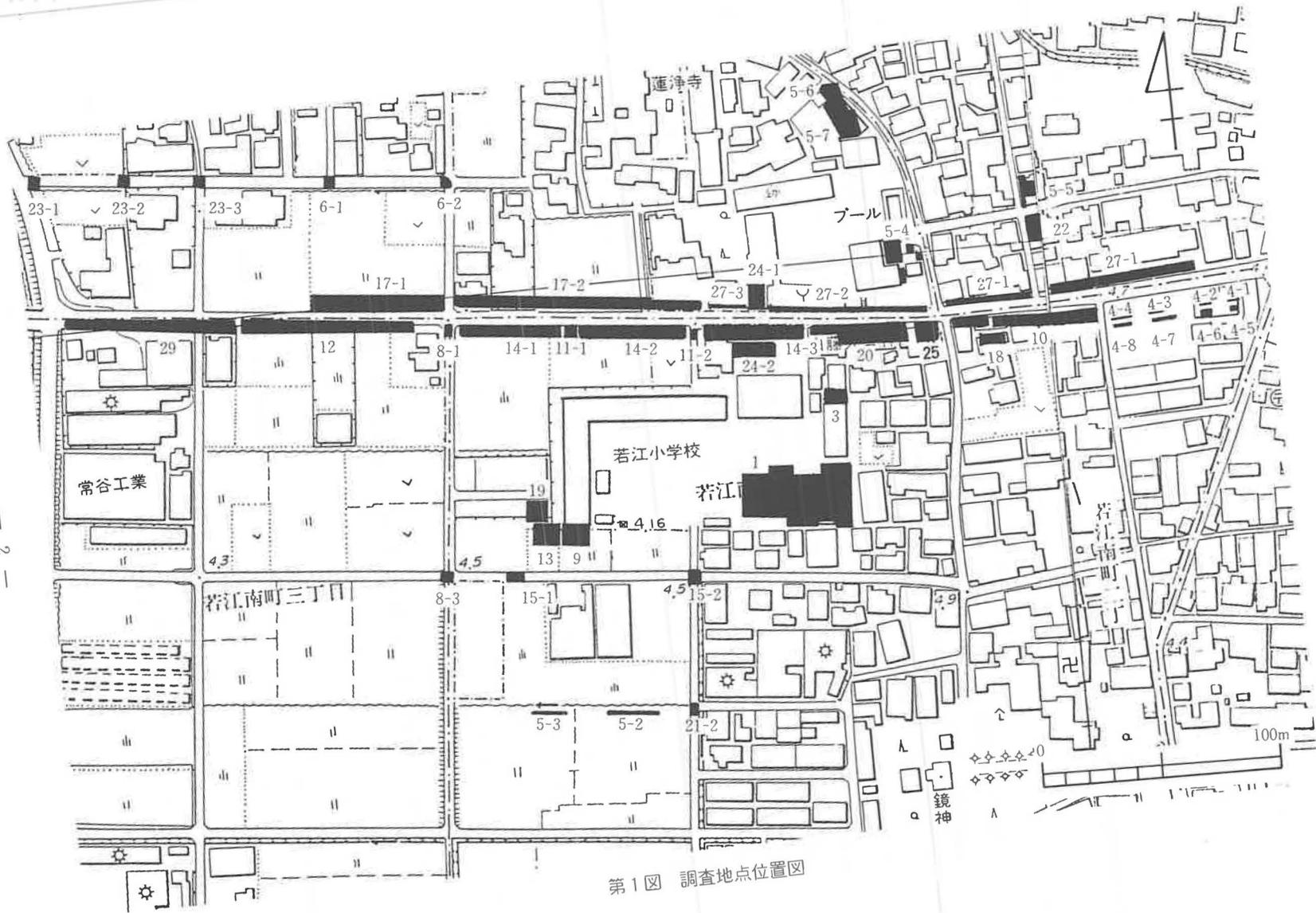
表 目 次

第1表	土師器皿型式分類表(1/4).....	11
第2表	原子吸光光度計の測定条件.....	38
第3表	若江遺跡出土の漆喰試料の分析値.....	39
第4表	明石城出土の漆喰試料の分析値.....	39
	土師器皿観察表.....	41~48

I. 調査に至る経過

東大阪市内には東西に延びる幹線道路が3本ある。北から鉄道・高速道路も走る中央大通りこと国道308号線、真中は通称・産業道路と言われる府道大阪枚岡奈良線、そしていちばん南にあるのが最近まで四条一長堂線と言われてきた府道大阪東大阪線である。昭和30年代後半以降の高度成長などによる産業の急速な発展に伴い、東大阪地域は大阪市の衛生都市として人口が増加していった。それとともに車の利用も急激に増え、道路の機能状況は飽和状態に落ち入りつつあった。そのため鉄道・高速道路の建設、道路の改良、区画整理が行われてきた。その一環として大阪府八尾土木事務所は昭和49年より府道大阪東大阪線の拡幅工事を計画・実施し、昭和52年には若江地域において拡幅工事を実施していくことになった。「若江」は弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡というだけでなく、日本史上に幾度となく現われる周知の場所であり、古くから“幻の城”と言われてきた若江城一応仁の乱以降の戦乱、室町幕府の崩壊、石山本願寺合戦などに関わった城一存在はとくによく知られている。

発掘調査は昭和47年の東大阪市立若江小学校校舎増築工事に伴う調査に始まる。そのおり鎌倉時代から室町時代にかけての遺構—井戸・溝・柱穴など—と多量の遺物—瓦器・土師器・陶器など—を検出した。これらは中世集落および若江城に伴うものであった。しかし遺跡の存在は昭和9年に実施された第2寝屋川の改修工事に伴い出土した弥生土器・土師器・須恵器・瓦などによって注目されるようになった。また昭和42年の若江公民館の建設工事のときにも土師器・須恵器・瓦が出土し、井戸も発見されたといわれている。その後、遺跡内において住宅建設が増加し、これらに伴い国庫補助事業による発掘調査が昭和49・50・54・56年と実施され、堀・溝・博列・柱穴列、そして瓦・土師器・陶器などの若江城に関わる遺構・遺物が多く検出された。また下水管理設工事などの公共事業に伴う調査も昭和49年以降実施されるようになり、中・近世の遺構・遺物だけでなく、弥生時代後期の遺物包含層を確認するに至った。これらのことから若江城・中世集落の一端を知る手掛りを得、本遺跡の性格が明らかになりつつあった。このような中で昭和52年以降、東大阪市民の生活に大きな役割を果たしている府道大阪東大阪線の拡幅工事を実施していくに至った。それまでの調査結果などから、府道は若江遺跡の中核をなす若江城を横断していることが明らかであり、大阪府八尾土木事務所と協議を進め、発掘調査を実施していくことになった。その結果昭和52年度の調査から今回の調査まで毎年行われてきた(第11・12・16・18・19・24・25次)。これらの調査で中・近世の井戸・溝・土壇などの遺構と瓦器・土師器・陶器などの遺物を検出し、若江地域における当時の集落および人々の生活を窺うことができるようになった。とくに若江城に伴う遺構—堀・建物跡・整地層など—、遺物—瓦・土師器・木製品・金属製品(銭貨・鉄砲玉)・壁下地など—が多く検出され、その輪郭を現わしつつある。今回の調査は昭和58年3月4日から3月31日まで(昭和57年度分)実施したものであり、遺物整理は昭和61年12月2日から昭和62年3月31日まで行った。



第1図 調査地点位置図

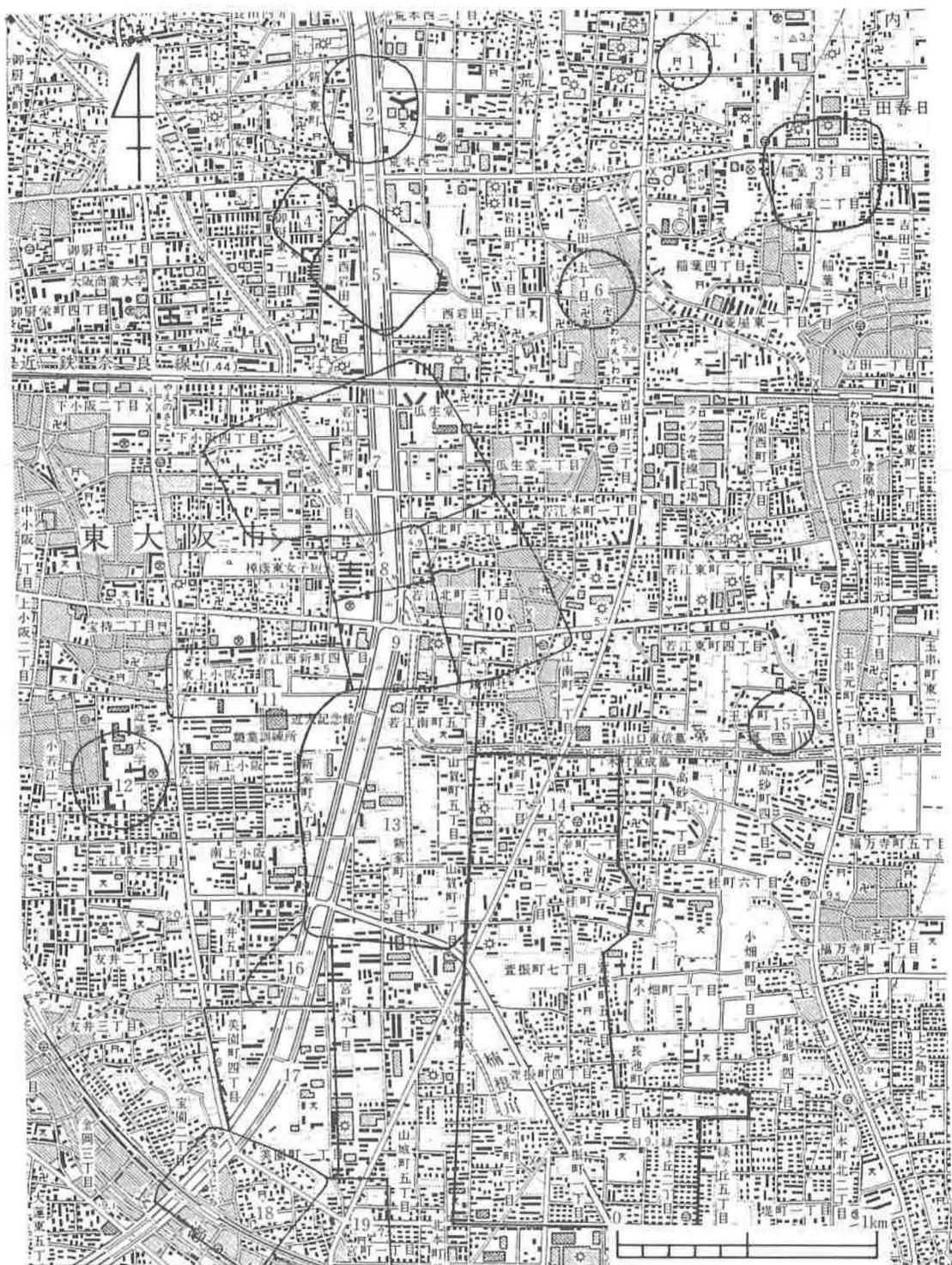
Ⅱ．位置と環境

若江の中央を通ったが此所には今城も何もなく、唯多数の住民の居る町のみがあった、

これは天正9年(1581年)4月14日に宣教師ルイス＝フロイスがローマに書き送った書翰(『日本耶蘇会年報』)の一節であり、同年2月24日の若江の様子を記したものである。この時期を最後にして若江は政治史の表舞台から姿を消すことになる。その若江が日本政治史上に姿を現わすのは室町幕府が成立し、畠山氏が河内守護に任ぜられてからのことである。この地は河内のほぼ中央に位置しており、高野街道・十三街道が走る要衝の地であることから城が築かれた。一時期、河内の守護所としての役割を果たし、守護代として遊佐氏が居城していた。応仁の乱以後、戦国時代にかけて城が各地に築かれ、南の萱振にも環濠集落としての城があった。この時期、畠山氏の内紛、三好氏の興亡、石山本願寺合戦など多くの戦いが繰り返され、そのつど若江城は戦乱にまきこまれたのである。

若江城跡を中核とする若江遺跡は東大阪市南部の中央、若江北町・若江本町・若江南町一带に広がる弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。この地は東に生駒山地が連なり、西に大阪湾を擁する大阪平野の中央、標高5mの所に位置する。大阪平野は淀川と旧大和川一恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川など一の堆積によって形成された沖積平野であり、江戸時代・宝永元年(1704)の大和川付け替え以前までは多くの川が走り、池(新開池・深野池など)が点在する低湿地が広がっていた。この平野は弥生時代以降、稲作の発展とともに開発が進められ、若江周辺の瓜生堂遺跡・山賀遺跡・美園遺跡などではすでに前期から集落を営んでいた。中期になると集落が大規模化するとともに増加し、瓜生堂遺跡・亀井遺跡など多くの遺跡で住居跡・方形周溝墓が検出され、多量の遺物が出土している。しかし中期末から後期になると自然現象一各地の遺跡でこの時期多量の砂の堆積が見られる一などにより、集落は増加しながらも小規模化する。若江遺跡もこの時期から人が住むようになり、近接の若江北遺跡や上小阪遺跡などからも後期の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代になると大和をはじめ各地に大規模な前方後円墳が築かれるなど、政治・社会的に大きく変化し、急速に発展していった。しかし東大阪市域においては大集落を営み、大古墳を築造する大きな勢力は見られず、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・山賀遺跡・小若江遺跡・佐堂遺跡など、小規模な集落が点在するだけであった。歴史時代になると友井東遺跡や美園遺跡などで条里遺構が検出されているが、大勢力があった形跡はない。若江では白鳳時代に寺院が建立され一平安時代、比叡山延暦寺座主・尊意大僧正の伝記『尊意贈僧正伝』に元慶年間(877～885年)に若江寺が存在したことが記されている一、若江郡衙も設置されている。これまでの調査においては明確な遺構は検出しておらず、瓦・土師器・瓦器など白鳳時代から平安時代に亘る遺物は多く出土している。隣接する西郡廃寺遺跡・巨摩廃寺遺跡などでも古代寺院が存していたと思われるが伽藍などは不明である。



- 1 菱江廃寺 2 新家遺跡 3 稲葉遺跡 4 意岐部遺跡 5 西岩田遺跡 6 岩田遺跡 7 瓜生堂遺跡
 8 巨摩廃寺 9 若江北遺跡 10 若江遺跡 11 上小阪遺跡 12 弥刀遺跡 13 山賀遺跡 14 萱振遺跡
 15 玉串遺跡 16 友井東遺跡 17 美園遺跡 18 佐堂遺跡 19 宮町遺跡

第2図 遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

調査は若江南町2丁目地内における府道大阪東大阪線道路の改良工事に伴うもので、現行道路の南面に位置した限られた地域である。この部分は旧歩道橋の南橋脚部にあたり、調査直前までその基礎部が残存していた。調査はそれを中心に東西9.1m、南北7.1mのトレンチ約65㎡の範囲について実施した。橋脚基礎部および表土については機械による掘削を行ない、現地表下2.6mまで人力により層を追って発掘調査した。遺構としては土壇、堀、溝を検出し、遺物は磁器、陶器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、木製品、石製品、金属製品などが出土した。

1．層位

調査地はこれまでの調査から、調査地域の北側約2分の1の範囲に若江城に伴う堀が存在することが想定できたため、東・西2壁の断面を残して調査を進めた。以下、東壁断面(第3図)をもとに基本的な層位を記述する。

第1層 盛土

第2層 暗茶褐色土 若干の土師器、磁器の小片を含む。

第3層 暗黄灰色砂質土混り暗灰色土

第4層 暗茶灰色土 土師器、陶器、磁器、瓦器の小片を含む。

第5層 灰茶色砂質土 土師器、瓦器、磁器、瓦を含む。

第6層 暗灰褐色土 多量の瓦とともに土師器、瓦器、陶器、磁器を含み、漆喰片を検出した。遺物はとくに下部に集中しており、白鳳時代の瓦から16世紀後半の土師器皿までのものが混り合った状態で出土した。第5層とともに城廃絶時の堀埋土。

第7層 暗青灰色シルト質粘土と暗褐色細・中粒砂の互層 少量の土師器片を含む。

第8層 暗褐色土混り暗灰色粘質土

第9層 暗灰色砂質土 小礫を含む。

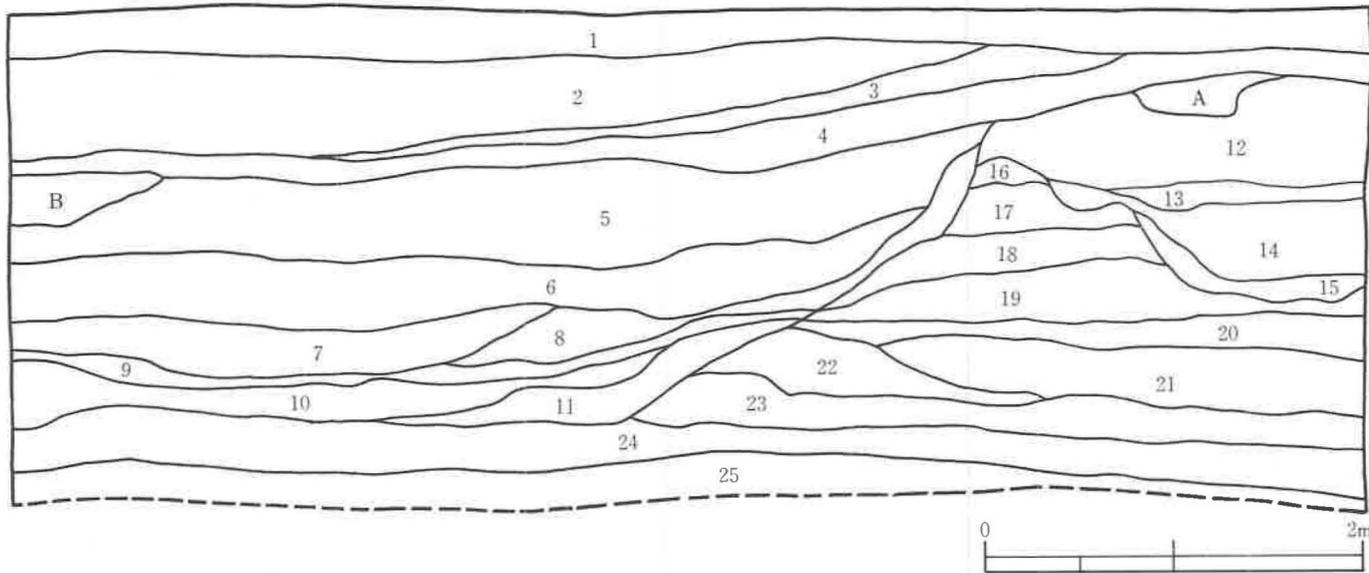
第10層 暗青灰色粘土 瓦、土師器、陶器、磁器、瓦器とともに漆器椀、杓子状木製品などの木製品を多く含む。堀堆積土。

第11層 暗灰色土と黄褐色砂の混土

第12層 暗褐色粘質土 城に伴う整地層で、堀南肩部。平安時代から室町時代後半にかけての遺物—土師器、瓦器、磁器など—を多量に含む。16世紀中葉の整地層。

第13層 暗灰茶色粘質土 瓦、土師器、瓦器、磁器を含む。

第14層 灰茶色土混り暗灰褐色粘質土 多量の瓦、土師器、瓦器を含む。第13層とともに溝の埋土。



- | | | |
|---------------------------|-------------------|------------------|
| 1. 盛土 | 2. 暗茶褐色土 | 3. 暗黄灰色砂質土混り暗灰色土 |
| 4. 暗茶灰色土 | 5. 灰茶色砂質土 | 6. 暗灰褐色土 |
| 7. 暗青灰色シルト質粘土と暗褐色細・中粒砂の互層 | 8. 暗褐色土混り暗灰色粘質土 | 9. 暗灰色砂質土 |
| 10. 暗青灰色粘土 | 11. 暗灰色土と黄褐色砂の混土 | 12. 暗褐茶色粘質土 |
| 13. 暗灰茶色粘質土 | 14. 灰茶色土混り暗灰褐色粘質土 | 15. 暗灰色粘土 |
| 16. 暗黄灰色シルト質粘土 | 17. 暗灰褐色粘土 | 18. 暗黄灰色シルト |
| 19. 明褐色粗・中粒砂 | 20. 灰黄色細粒砂 | 21. 明黄色細・中粒砂 |
| 22. 褐色・灰黄色中粒砂 | 23. 灰茶色・暗黄褐色砂礫 | 24. 茶褐色中粒砂 |
| 25. 明褐色粗・中粒砂 | A. 暗灰茶色土 | B. 暗灰黄砂質土 |

第3図 東壁断面図

- 第15層 暗灰色粘土 土師器、瓦器の小片含む。溝堆積土。
- 第16層 暗黄灰色シルト質粘土 土師器を含む。
- 第17層 暗灰褐色粘土 第16・17層は溝の北肩。
- 第18層 暗黄灰色シルト
- 第19層 明褐色粗・中粒砂
- 第20層 灰黄色細粒砂
- 第21層 明黄色細・中粒砂
- 第22層 褐色・灰黄色中粒砂
- 第23層 灰茶色・暗黄褐色砂礫
- 第24層 茶褐色中粒砂
- 第25層 明褐色粗・中粒砂 弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物を含む。第19層以下は河川流路の堆積土。遺物はほとんどなく、第24層のみから出土。いずれもローリングをうけて表面が磨滅しているものが多い。
- 第A層 暗灰黄色砂質土 ビット埋土。
- 第B層 暗灰茶色土 土壇埋土。

2. 遺構

調査範囲内の中央部北よりに旧歩道橋の橋脚があったため、その基礎工事に伴う土壇—4 m × 6 m の卵形を呈し、最も深い所で現地表下約1.5mまで掘られており、底面にグリ石が敷かれていた一があり、近世以降の遺構はほとんど検出できなかった。しかしこの土壇は堀内の第6層上部までにおさまっていたので、堀南方には影響なかった。

遺構としては第5層上面で土壇1基、第12層上面でビット1基と堀、第16・17層上面で溝2条を検出した。以下、各遺構について記述する。

土壇

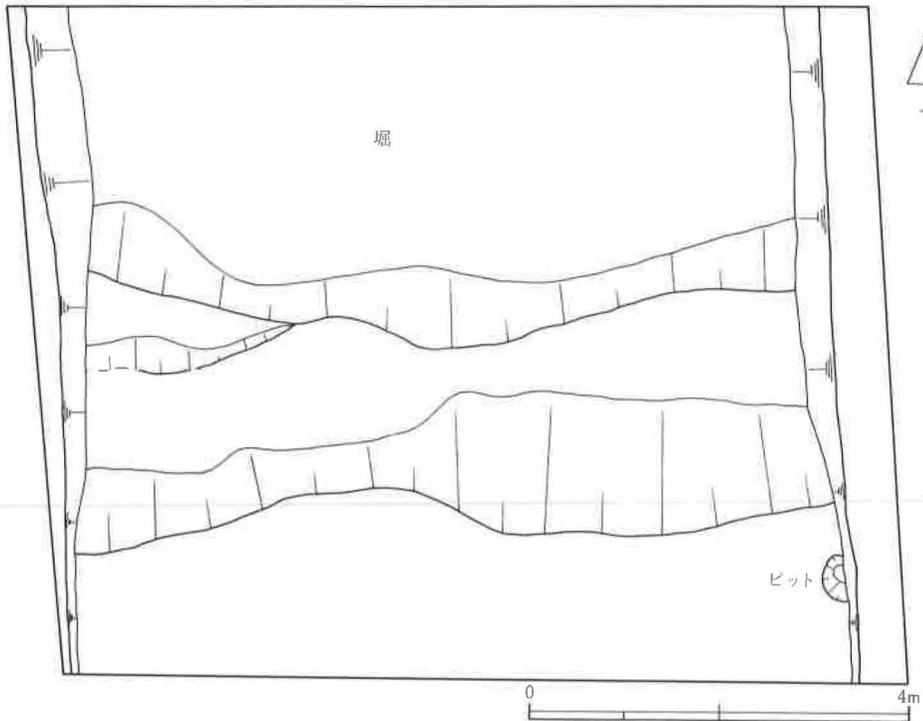
調査地北東隅、第5層上面で検出した。遺物はまったく含まれておらず、正確な規模および時期、性格については不明である。検出面での長辺(南北)約80cm、短辺(東西)約45cmあり、平面形は隅丸の長方形を呈していたと思われる。土壇壁面はゆるやかに傾斜して下がり、底面はフラットで深さ25cmを測る。時期は層位などから江戸時代前半ごろと考えられる。

ビット (第4図)

調査地南東隅、第12層上面で検出した。ビット内には遺物はまったく含まれていなかった。径約50cm、深さ18cmの逆円錐台形を呈する。第12層上面で検出したが、堀に伴うものではなく、近世以降のものと考えられる。

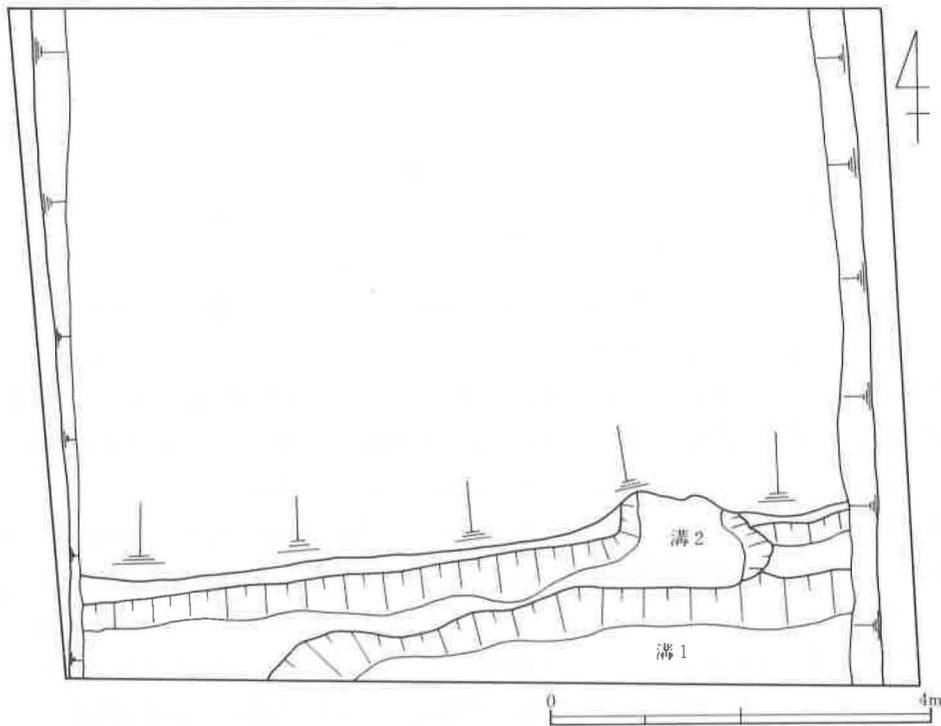
堀 (第4図 図版5)

調査地の全域で東西に延びる堀を検出した。北肩は調査地外で南肩のみである。堀は16世紀



第4図 堀・ピット平面実測図

中頃に整地された第12層上面より掘り込まれており、西側では3段、東側では2段に落ちている。とくに東側の下段は掘り出したものではなく、砂と粘土を混ぜ合わせて固めた(第11層)と考えられる。堀は調査地区内で幅5m、深さは検出面から1.6mを測る。南壁面はやや垂直に約60cm落ち、そこで少し屈曲してなだらかに50cmほど下がって幅0.5~1mの1段目のフラットな面をなし、のちゆるやかに傾斜して底に達している。底面はフラットな砂地(第24層)であり、さらに北(調査地外)へ続く。堀内は第5~10層の6層に区分できる。第5・6層は堀の埋土である。特に第6層からは多量の瓦をはじめ土師器、瓦器、陶器、磁器などが出土した。これらの遺物の中には白鳳・奈良時代の瓦や平安・鎌倉時代の土師器、瓦器なども含まれていた。しかし室町時代後半の遺物が多く、最も時期の下るもの(土師器皿)から見て、16世紀後半の層である。第10層は堀の堆積土であり、瓦、土師器、磁器とともに漆器椀、蓋、曲物底板、杓子状木製品など多くの木製品が出土した。これらの遺物などから、この堀は16世紀中頃に掘られたものと思われる。堆積土と埋土との間の第7~9層のうち第7層は砂とシルト質粘土の互層であり、流路の中の堆積状態を示している。それに対し第8・9層は砂・小礫を含む炭混りの混層であった。これらのことからこの堀は16世紀中葉から後半にかけての短期間のものであり、掘削直後からの第1次堆積(第10層)、第1次埋土(第9・8層)、第2次堆積(第7層)、第2次埋土(第5・6層)の4期に分けることができる。検出状態やこれまでの調査結果などから、この堀の幅は10mを越えるものと考えられる。堀は本年度調査地の西、昭和56年度調査において多量の瓦一軒丸瓦・軒平瓦を多く含む一、壁下地などを検出した堀⁽¹⁾に相当するものであり、さ



第5図 溝平面実測図

らに東側、昭和54年度調査の溝⁽²⁾1につながる。このことからこの堀はほぼ東西に約160m⁽³⁾延びる若江城の堀の一部である。

溝(第5図 図版8)

整地層を取り除くと、南壁に沿ってほぼ東西に延びる溝1とそれに直行して南北にはしる溝2を検出した。溝は第16・17層より掘り込まれている。溝1の南肩は調査地で北肩のみであり、溝2は溝1に直行してつながっているが北側のほとんどは堀によって削り取られている。

溝1は調査地区内での幅1.8~0.7mで、検出面からの深さ0.4~0.2mを測る。溝は西側では浅く、東側は2段に落ちやや深く、底面はフラットになっている。溝内は3層に分かれ、第13・14層は埋土で遺物を多量に含み、第15層は堆積層で遺物は少ない。埋土内からは土師器皿、瓦器椀・皿、磁器、瓦などが出土し、特に第14層には白鳳・奈良時代の瓦が多く含まれていた。堆積内からは土師器皿、瓦器椀が出土しているがいずれも小片であった。

溝2は幅1.2m、深さ0.1mの浅いもので、北から南へ下って溝1につながっている。溝は第14層の土で埋っていたがほとんど遺物を含んでいなかった。

溝は時期差のある多量の遺物を含んでいたが、層、遺物などから15世紀後半ごろに掘られたものと思われ、16世紀中葉の整地のときに完全に埋没した。

注(1) 「若江遺跡発掘調査現地説明会資料」昭和57年4月10日 財団法人東大阪市文化財協会

(2) 『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編』 東大阪市遺跡保護調査会 1982年

(3) 勝田邦夫「若江城の遺構・遺物」 『東大阪市文化財協会ニュース』 2-3 財団法人東大阪市文化財協会 1987年

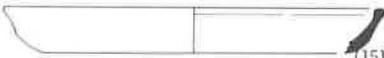
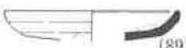
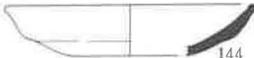
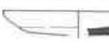
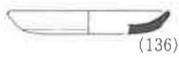
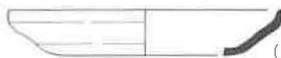
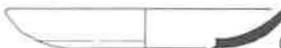
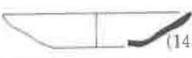
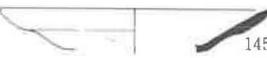
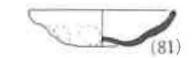
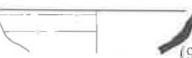
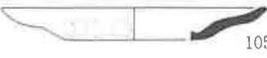
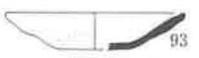
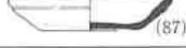
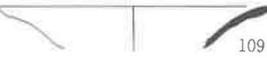
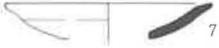
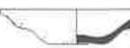
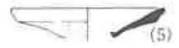
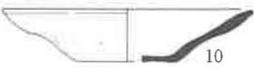
3. 出土遺物

今回の調査では瓦、土師器、瓦器、陶器、磁器、木製品、石製品、金属製品などが出土した。以下、遺物の出土状態から(1)上部遺物包含層(第1～4層)、(2)堀埋土(第5・6層)、(3)堀堆積土(第10層)、(4)整地層(第12層)、(5)溝埋土(第13・15層)、(6)下部遺物包含層(第16～25層)に分けて記述する。

出土遺物の中で瓦に次いで出土数が多いのが土師器の皿である。記述を進めていくうえでその繁雑さを少なくするため型式分類しておく。前述したように堀・溝などの遺構から多量の遺物が出土しているが、それらは白鳳時代から安土・桃山時代にかけてのものが混り合っており、時期決定するための一括資料としての役割は果たさない。そのため第1表に掲げた分類表は『神並遺跡Ⅰ』および『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺物編』に掲載されている分類表⁽¹⁾などを参考にして作成したものであり、あくまでも型式分類であることを断わっておく。

皿はその形態およびこれまでの研究成果から小皿・中皿・大皿に分けた。小皿は口径8cm前後までのもの、中皿は10cm前後のもの、大皿は11cm以上のものとした。またその胎土・色調などから白色系と褐色系に大別することができる。しかし白色・褐色系ともその型式変化は巨視的に見てそれほどの大差はなく、むしろ相補い合っていると思われる。もちろん色調、とくに胎土は全く異っており、白色・褐色を併記して作成してみた。将来、その変遷過程をたどりうる資料の増加をまって両系統の型式編年の分類を試みたい。今回、小皿・中皿・大皿をその形態から型式分類を行ない、A～Kまでの11型式に区分した。この分類表で使用した遺物は本調査で出土したものに限ったため、該当するものがない場合は空白にした。

- A. 体部は平らな底部から外反しながら立ち上がり、口縁部は水平近くに伸び端部をほぼ直角に屈曲させて丸くおさめている。
- B. 体部は平らな底部から屈曲して外上方へ立ち上がり、口縁端部は内側に折ってやや四角くおさめ段を有す。
- C. 体部は浅い凹面をもつ底部から屈曲して外上方へ立ち上がり、口縁端部を少し立たせて丸くおさめている。
- D. 体部は平らな底部から屈曲して外上方へ立ち上がり、口縁端部をつまみ上げぎみに立たせ尖らせている。
- E. 体部はゆるやかな凹面をもつ底部より屈曲して少し丸みを持ちながら外上方へ立ち上がり、口縁端部を少し尖らせている。
- F. 体部は凹面をもつ底部より外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に肥厚させ、端部をほんの少しだけつまみ上げている。
- G. 体部は凹面または平面をなす底部より外反して立ち上がり、口縁部をやや肥厚させ、端部を少し立たせている。
- H. 体部は凹面をもつ底部より外反しながら立ち上がり、口縁部は肥厚させて内外面にふくらみ、端部を少し尖らせている。

	小 皿		中 皿		大 皿	
	白	褐	白	褐	白	褐
A			 142			
B					 151	
C	 77		 89		 144	 48
D	 78  136				 14	 13
E	 138  141				 146	 147
F			 96  143		 145  104	
G	 88  81		 90  99		 105	
H	 79  82		 93  87		 109	
I	 46		 7		 12	
J	 6  5				 10	
K	 4					

第1表 土師器皿型式分類表(34)

()は褐色系

- I. 体部はやや凹面を呈する底部より外反しながら立ち上がり、口縁端部は外へ開き、少し尖らせておさめている。
- J. 体部は凹面を呈する底部より外反しながら立ち上がり、口縁部は肥厚させナデによる段を有し、端部をやや丸くおさめている。
- K. 体部はゆるやかな凹面を呈する底部よりゆっくり外反しながら立ち上がり、口縁端部をやや丸くおさめている。

以下、土師器皿を記述する場合、色と型式記号を併記して表わす。たとえば白色系のA形式の場合は^レ白A、褐色系のCの場合は^レ褐Cと記す。

(1) 上部遺物包含層—第1～4層— (第6図 図版10)

第2層からは土師器小皿、磁器、第4層からは土師器小皿・中皿と瓦器小皿、磁器、陶器が出土した。

第2層

土師器小皿(2) 褐Kに属する。

第4層

土師器小皿(1) 白Jに属する。

土師器中皿(7) 白Iに属する。

瓦器小皿(3) 体部はゆるやかな凹面を呈する底部よりゆっくと立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。内面粗いヘラミガキ。見込み暗文は磨滅していて不明。

(2) 堀埋土—第5・6層—

第5層からは土師器小皿、磁器、瓦器、瓦、円盤状瓦製品、土師器甕、第6層からは土師器皿・椀、瓦器皿・椀、瓦質土器、須恵器、磁器、陶器、石製品、円盤状瓦製品と多量の瓦などが出土した。第5・6層は土質および遺物の包含状態など相違するが、堀の埋土であり、両層の間にはほとんど時間差が考えられないことから、器種・器形別に一括して記述する。

土器類 (第6図 図版10・16)

土師器小皿(4～6) 小皿は白K(4)、褐J(5)、白J(6)のものが出土しており、とくに白Jのものが多。

土師器中皿(8・9) 褐C(8)、褐J(9)が出土している。

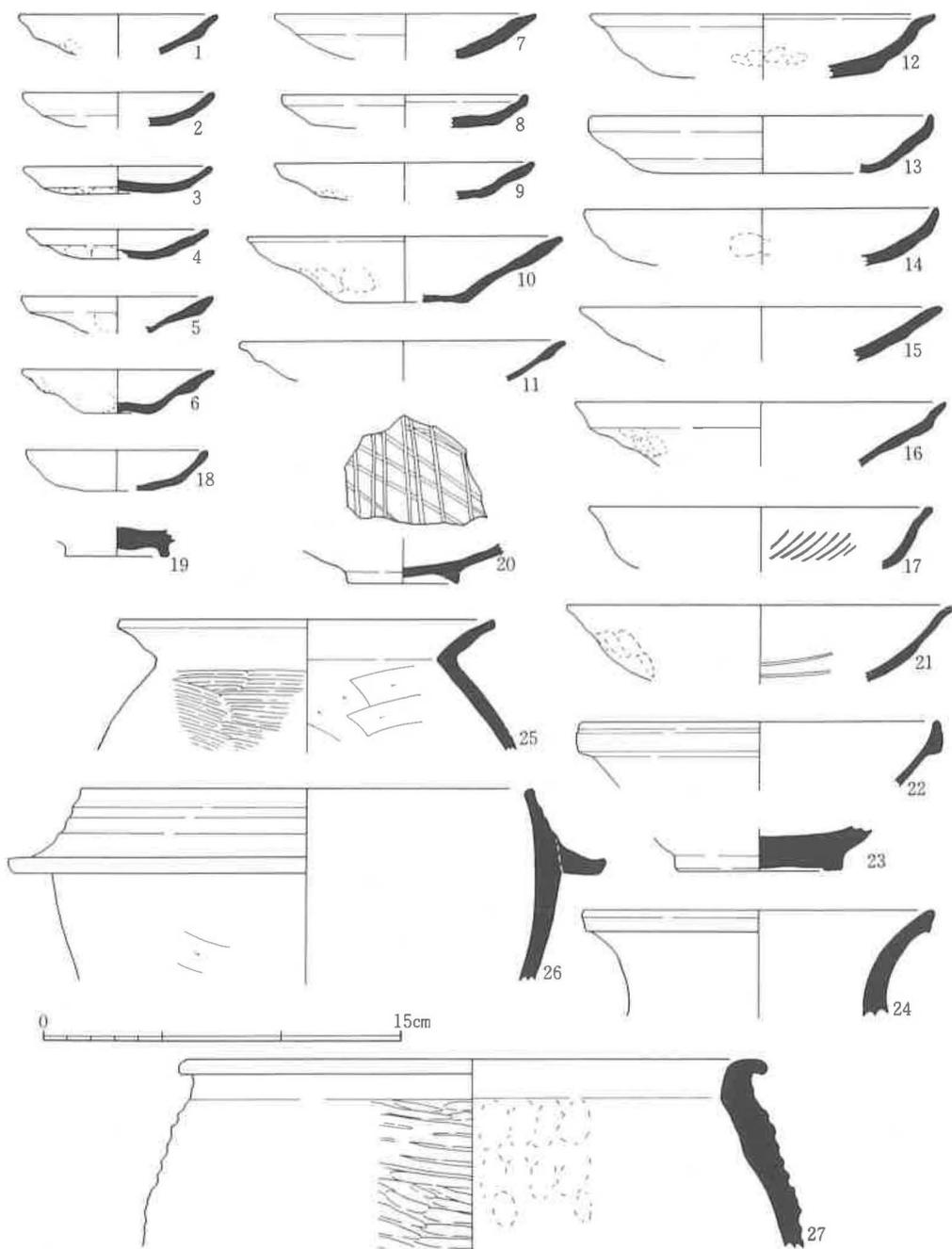
土師器大皿(10～15・17) 褐D(14)、褐E(13)、白H(10)、白I(12・15)、褐J(11)が出土している。小片を含め白・褐のJ型式のものが多。17は体部を底部からやや内弯させながら立たせ、口縁部を少し外に開いている。橙色を呈し、内面に斜方向のミガキが施されている。数少ない奈良時代のものである。

土師器椀(16) 橙色を呈し、体部外面に明瞭な指頭圧痕が見られ、口縁部は強いヨコナデを施したやや浅いものである。

瓦器小皿(18) 浅い凹面をもつ底部より体部は立ち上がり、口縁端部を少し立たせて丸くおさめている。

瓦器椀(20・21) 20は底部のみで、断面三角形を呈する高台をもち、見込みに明瞭な斜格子の暗文を有す。21の体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部を少し外反させて丸くおさめている。内面には粗いヘラミガキを施している。瓦器椀は土師器皿ほど多くはないが10数片出土している。

瓦質羽釜(26) 口縁部はやや内傾して立ち上がり、ゆるい段を3段有して端部を四角くおさめている。鏝は短かく水平に取りつけその端部を少し上へそらしている。体部外面はヘラケズ

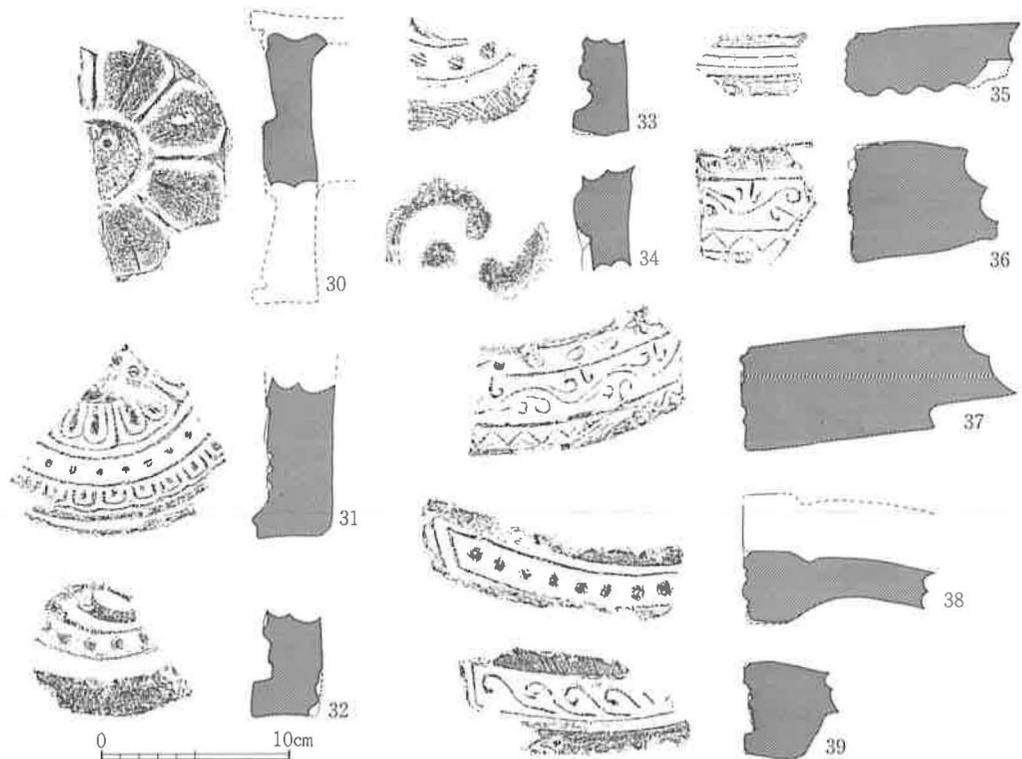


第6図 上部遺物包含層・堀埋土内出土遺物実測図 一土器一

り、内面はハケを施している。外面にはススが付着しており、内面は磨滅が激しい。

瓦質甕(27) 体部は少し内傾し、口縁部は外反して端部を外下方につまみ出して丸くおさめている。体部外面は平行タタキをやや深く施している。内面はユビオサエののちナデ調整。

白磁碗(19・22・23) 22・23はともに灰白色を呈す。22はゆるやかに外反して立つ体部に断面三角形の肥厚した口縁をもつ。23は底部で、高台は低く削り出し、外面下部から高台部は露



第7図 堀埋土内出土遺物実測図 一瓦一

胎のままである。19は朝鮮白磁の碗底部で、削り出しの低い高台をもち、その高台底面は4ヶ所浅く削っている。内面には褐色を呈する釉が施されており、底部外面、高台部は施釉されていない。

青磁碗(28・29)ともに竜泉窯系で淡緑灰色を呈する。28は口縁部片であり、29は体部片で外面にやや間隔の広い蓮弁文をもつ。

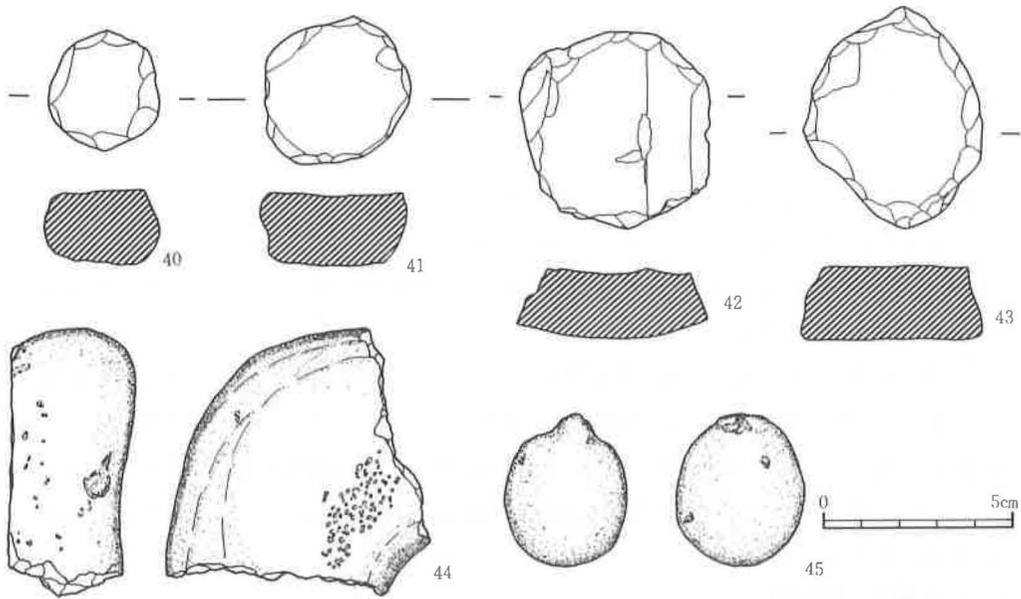
須恵質甕(24) 頸部はゆっくりと外反して立ち上がり、口縁部は段を有し、端部を丸くおさめている。

土師器甕(25) 庄内式。口縁部は「く」の字状に外反し、端部をやや尖らせておさめている。体部外面はやや細かいタキを施し、内面はヘラケズリ調整している。磨滅が著しい。

瓦類(第7図 図版17・18)

瓦はとくに第6層から多量に出土し、ほとんどは平瓦・丸瓦であった。白鳳・奈良時代の瓦も多く含まれており、これらはもともと若江寺などに葺かれていたものと思われる。以下、軒丸瓦・軒平瓦について記述していく。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦(30) 白鳳時代前期。素弁百済様式。八葉の弁肉は中肉で弁中央に低い稜を有し、弁端はやや平たい円形を呈している。中房はやや高い凸形で大きく、小粒な蓮子が1+5に配されている。周縁は欠損していて不明。今回2点出土。若江遺跡では第21・26次の調査で各1点ずつ出土している。



第8図 堀埋土内出土遺物実測図 一瓦・石製品一

複弁蓮華文軒丸瓦(31) 白鳳時代後期。花卉文(雷文)縁 花卉端切込反転(蓮子周環消失)形式に属する。内区・中房は低くて大きく、1+8+12と三重の蓮子を配している。花卉は中央の稜線で2面分割され、子葉は細長く丸みをもっている。弁端は切込みがあり、先端は反転状を示す。外区には二重の圏線があり、その中に連珠を密接して配している。周縁は幅広く内斜面に雷文と称される花卉文を飾る。この層からは5点出土しており、復元径は18cm前後を測る。厚さは2cm前後のもの、4cm前後のものがある。

巴文軒丸瓦(32~34) いずれも左廻りの三巴文を内区に配したものである。32は外区に丸みをもった小形の連珠をめぐらし圏線を入れている。33は外区に円筒形で大型の連珠をめぐらせ外側に圏線を有し、瓦当面にケズリ痕が見られる。34は内区のみで肉厚の丸みをもった巴文を配している。32と34は同形である。

重弧文軒平瓦(35) 五重弧文段顎形。瓦当部は浅い半截竹管押し引きによる五重弧である。顎ははりつけの中顎で、顎面に5段の深い凸形の並行線文がある。平瓦部凹面は細かい布目痕を残し、凸面は板状工具でナデて仕上げている。類例は四天王寺、奈良・巨摩寺などで出土。

偏行唐草文軒平瓦(36・37) 珠文・鋸歯文帯波状文形式。内区中心飾は連続波状の茎から2本ずつの蕨手が派生した形をとっている。しかし一部を除いては2蕨手のうち一つは上下の外区境界線より派生した形をとっている。上部外区には珠文、下部外区には鋸歯文を飾る。顎は削り出しの広い段顎で、顎部・平瓦部の凹面・凸面とも丁寧に板状工具でナデて仕上げている。類例、藤原京跡6641型式類。

連珠文軒平瓦(38) 内区に丸みをもった大型の珠文を一行に配している。やや太い界線を有し、断面四角形の低い周縁をめぐらしている。顎は曲線顎である。平瓦凸面は縦方向に丁寧に

ヘラケズリを施しており、凹面にはやや細かい布目痕が見られる。

均整唐草文(39) 三葉の中心花から4本の支葉が斜放射状に延び、すべて内側を向いている。細い界線を有し、断面四角形の高い周縁をめぐらしている。頸は強い段頸で、平瓦凹面はナデ、凸面はケズリによって仕上げている。

円盤状瓦製品・石製品(第8図 図版18・19)

円盤状瓦製品(40~43) 平瓦・丸瓦の一部を円形に打ち欠いて作られている。径約2.9cm・厚2cmの小型のものから、短径4.5cm・長径5.9cm、厚1.9cmのものまであり、形・大きさはそれぞれ異なる。面子として使用か。

石製品(44・45) 44は安山岩製。長円形を呈し、中央に円孔が穿かれていたと思われる。表面は凹ませて丁寧な磨いている。凹面にはほぼ周辺に平行してスリギス痕があり、中央付近には敲打痕が見られる。45は砂岩製。横径2.9cm、縦径4cmの楕円球状を呈し、上部に未穿孔の鈕をもつ。鈕は高0.6cm、幅1.2cmを測り、両面から横方向に削り出している。そののち径約0.2cmの孔を穿ちかけている。

(3) 堀堆積土一第10層一

第10層からは土師器皿、瓦器碗、磁器、瓦などとともによくの木製品が出土した。

土器類(第9図 図版11)

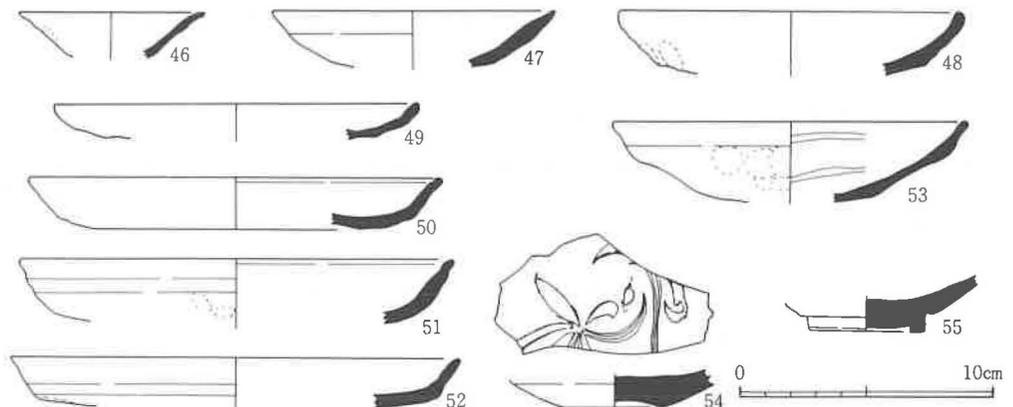
土師器小皿(46) 白I。他に数点出土しているがほとんど小片である。

土師器中皿(47) 口縁端部の開きは少ないが、白Iに属する。口縁端部にコゲ跡がある。

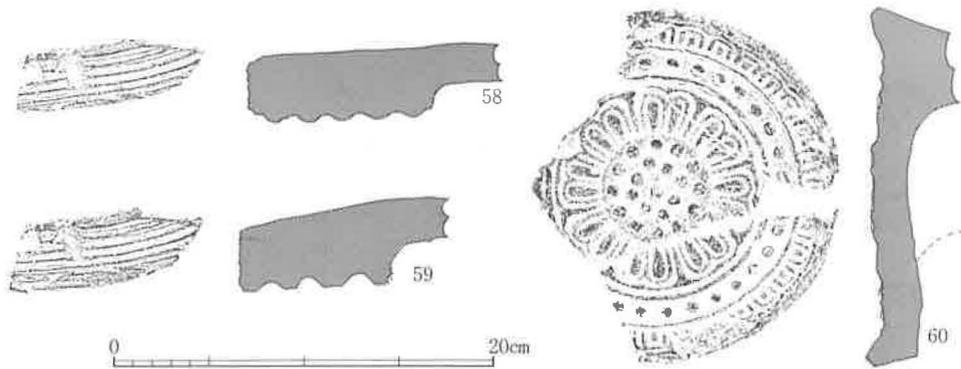
土師器大皿(48~52) 褐C(48)、褐D(52)、褐G(50)、褐H(49)、褐I(51)がある。5型式のものが見られるが、小皿・中皿・大皿ともI型式の割合がいちばん多い。

瓦器碗(53) 体部は底部から外反しながらゆるやかに立ち上がる。口縁部は強いヨコナデを施して体部との間に稜を有し、端部を丸くおさめている。体部外面ユビオサエ、内面粗いヘラミガキ。

青磁(54・56) 底部外面に浅い凹みをもつ皿で明緑灰色を呈す。見込み部には草花文様が見られる。56はオリーブ灰色を呈する竜泉窯系の碗片である。内外面とも約2mm幅の圈線が1条



第9図 堀堆積土内出土遺物実測図 —土器—



第10図 堀堆積土内出土遺物実測図 一瓦一

あり、外面には幅広の蓮弁文をもつ。

瀬戸碗(55) 天目茶碗底部。露胎のままの削り出し高台で、内面は黒褐色を主とする釉が施されている。

備前播鉢(57) 口縁部を高く上方に立ち上がらせ片口を有す。内面に6条の櫛描条線がみられる。間壁忠彦氏編年のV期。⁽³⁾

瓦類(第10図 図版17・18)

複弁蓮華文軒丸瓦(60) 31と同型。瓦当は黒色を呈す。裏面は粗いナデ、側面はヘラケズリで整形している。

重弧文軒平瓦(58・59) 35と同型。段顎の五重弧文軒平瓦。

木製品(第11図 図版19・20)

漆器椀(61) 体部は土圧によって変形している。ロクロ挽出しによって製作。高台は高く、裏面の削り出しは浅い。体部は内弯ぎみに立ち上がるが、口縁端部は欠損している。内外面に黒漆を塗っていたと思われるが、体部外面はほとんど剝離している。見込み部には朱漆によって鶴(?)が描かれている。横木取り、征目。残存高6.6cm。高台径6.7cm、高2.1cm。

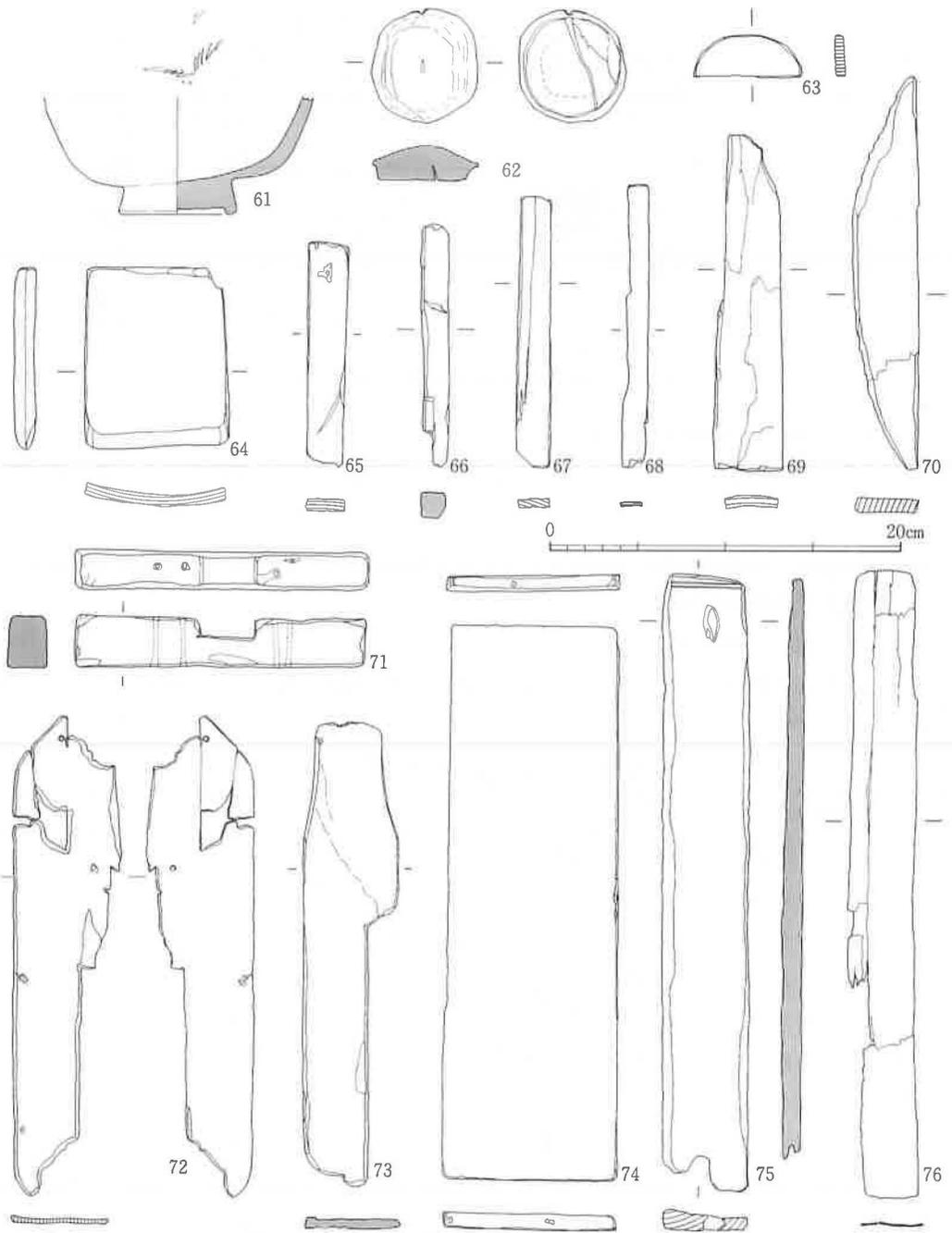
蓋(62) 円形で上部を山形につくる。下半部は径をせまくして、用器の本体にはめ込むようにしている。上部径6.1cm、下部径5.5cm、高2cm。

円形曲物底板(63・70) とともに一部。63は径6.1cmの小型のものでほぼ半分が残存しており、平・側面とも丁寧にならされている。70は周円の一部で、焼けて破損が著しい。

木札状木製品(65・75) 65は幅2.2cm、厚さ0.6cmの板材。上下端部欠損。上部中央に径0.2cmの円孔を穿っている。残存長12.3cm。70は幅4.9cm、厚さ1.2~0.7cmの板材。上端近くに幅0.3cmの溝を掘り、その下に2×0.5cmの孔を穿っている。下部は欠損しており、残存長35.5cm。

杓子形木製品(73) 柄の端部欠損。残存長26.6cm。柄幅3.8cm・残存長6.6cm、身幅5.4cm・残存長20cm、厚さ0.6cmの身長のもの。柄部は身部の両端をゆるやかに削り込んで作っている。

角棒状木製品(66・71) 66は一辺1.45cmで断面隅丸方形を呈す。両端は欠損しており、残存長13.9cm。71は下部辺2.3cm、上部辺1.9cm、高2.9cmの断面台形をなすもの。中央に長3.3cm、



第11図 掘堆積土内出土遺物実測図 一木製品一

深さ1cmの削りがあり、4ヶ所に径0.2cmの円孔を穿っている。組み合せ木製品の一部。

板状木製品(64・67・69・74) 64は上辺7.3cm、下辺8.3cm、長さ10.3cm、厚さ0.7cmの少し湾曲した末広りの板材である。平・側面とも丁寧に仕上げられており、下端辺部は削って断面三角形を呈す。67は残存幅1.9cm、厚さ0.4cmの板材。一短辺は角をおとして山形をなす。もう一短

辺は欠損。残存長15.4cm。69は残存最大幅4cm、厚0.6cmの若干湾曲した板材。凸面には黒漆が見られ、凹面にもかすかに残っている。全長19cm。74は幅9.7cm、厚さ0.9cm、長さ31.7cmの板材。短側面に1・3の釘穴と思われる約0.2cmの円孔がある。いずれも用途不明。

薄板状木製品(68・72・76) 68は残存最大幅1.5cm、厚さ0.2cmの短冊形の板材。一端は欠損しており、残存長16.2cm。72は残存最大幅6.1cm、厚さ0.2～0.3cmの板材。両端は角を丸く削って山形をなし、残存部5ヶ所に0.2～0.3cmの円孔を穿っている。両端とも欠損し、残存長27.7cm。76は幅3.7cm、厚さ0.1cm、全長35.8cmを測る隅丸の短冊形を呈する。いずれも用途不明。

(4) 整地層—第12層—

第12層は16世紀中葉に整地された50～60cmの層で、時期差のある遺物が多量に含まれていた。遺物は土師器皿、瓦器椀・皿、瓦質播鉢、磁器、瓦、金属製品などが出土した。

土師器皿(第12図 図版12・15)

土師器小皿(77～88) 小皿は褐C(77)、白D(78)、褐E(80・85)、褐G(81)、白G(88)、白H(79・83・84)、褐H(82・86・87)とあり、H型式が多い。

土師器中皿(89・102) 中皿は褐C(89)、白F(96)、褐G(99)、白G(90・101)、褐H(91・94・95・98・100)、白H(92・93・97・102)とあり、H型式が多く出土している。

土師器大皿(103～110) 大皿は褐E(108)、白F(104)、白G(105)、白H(106・107・109・110)とあり、小・中皿と同じくH型式が最も多い。

瓦器・土師器・陶器・磁器(第13図 図版13)

瓦器椀(111～115) 瓦器椀の出土も少なくないが小片が多く、完形・復元可能なものは皆無である。111・112は庭部からゆるやかに立ち上がる体部をもち、口縁端部を丸くおさめている。体部外面はユビオサエ、口縁部はヨコナデを施している。内面ヘラミガキはともに粗く、111は斜方向ののち横方向に施している。113は器高がやや高く、内面のミガキは密である。114・115は底部のみである。ともに高台は断面三角形を呈し、それほど高くなく、114の作りは雑である。114は並行線、115は斜格子状の見込み暗文を施している。

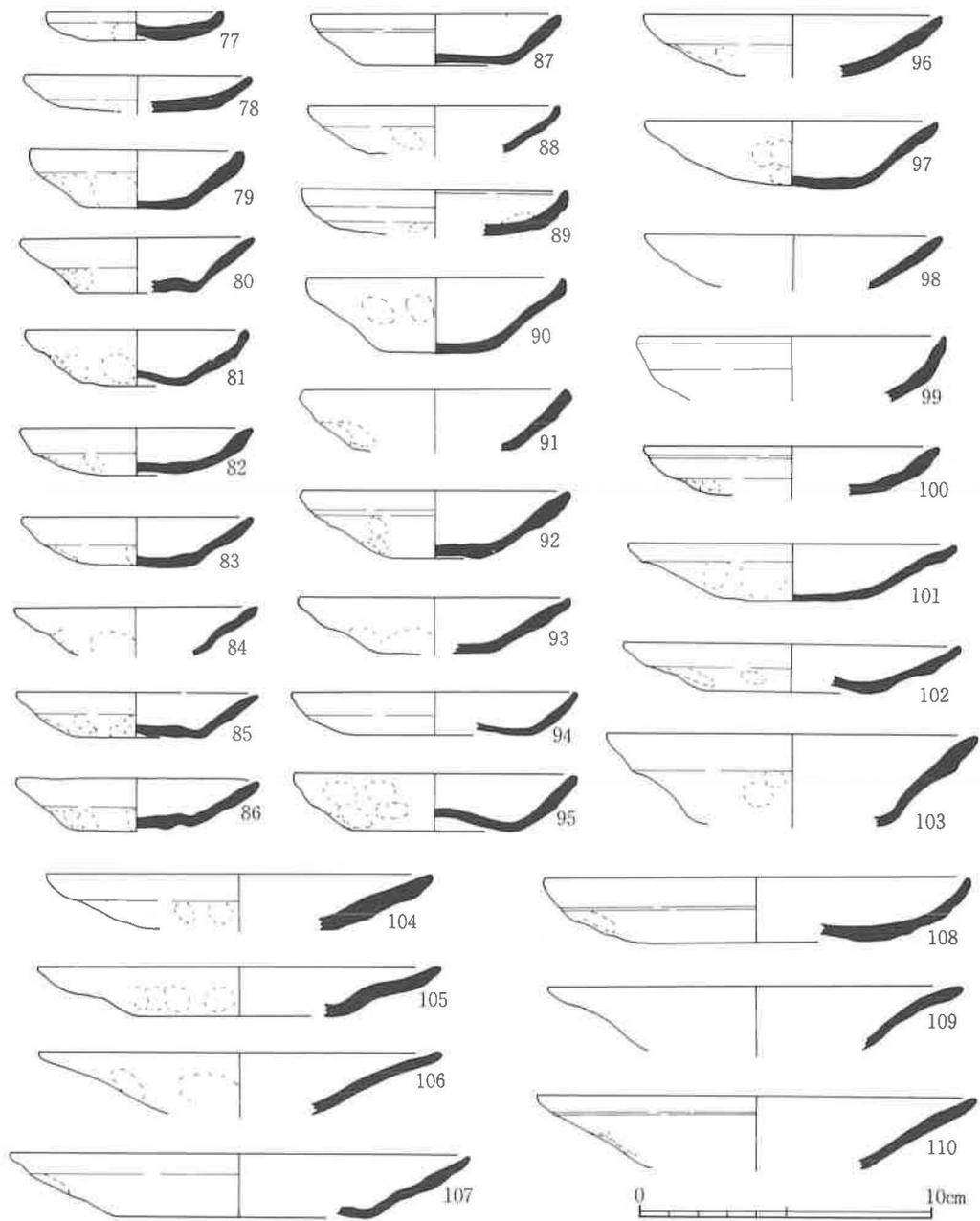
瓦器中皿(116) 体部は浅い凹面をもつ底部から外上方に立ち上がり、口縁部は少し開いて端部を丸くおさめている。体部と底部の間に浅い凹線を有す。底部外面ユビオサエ、口縁部外面から内面ヨコナデ。内面には粗いミガキを施している。

土師器椀(117) 底部のみで断面三角形のはりつけ高台を有し、橙色を呈す。

瓦質鉢(122) 口縁部は少し内傾ぎみにふくらみをもって立ち上がり、段を有して端部を丸くおさめている。口縁部外面および内面はヨコナデを施し、体部外面はヘラケズリ調整している。濃い灰色を呈する。

瓦質播鉢(123) 口縁部は内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめている。口縁部外面はヨコナデを施し、体部外面はヘラケズリ調整。内面には浅い楕円描線が見られる。

瀬戸小皿(118) 体部は平面をもつ底部から外湾しながら立ち上がる。口縁部はやや水平に開き、端部をほんの少し内傾して立ち上らせ四角くおさめている。内側は口縁部と体部の間に段



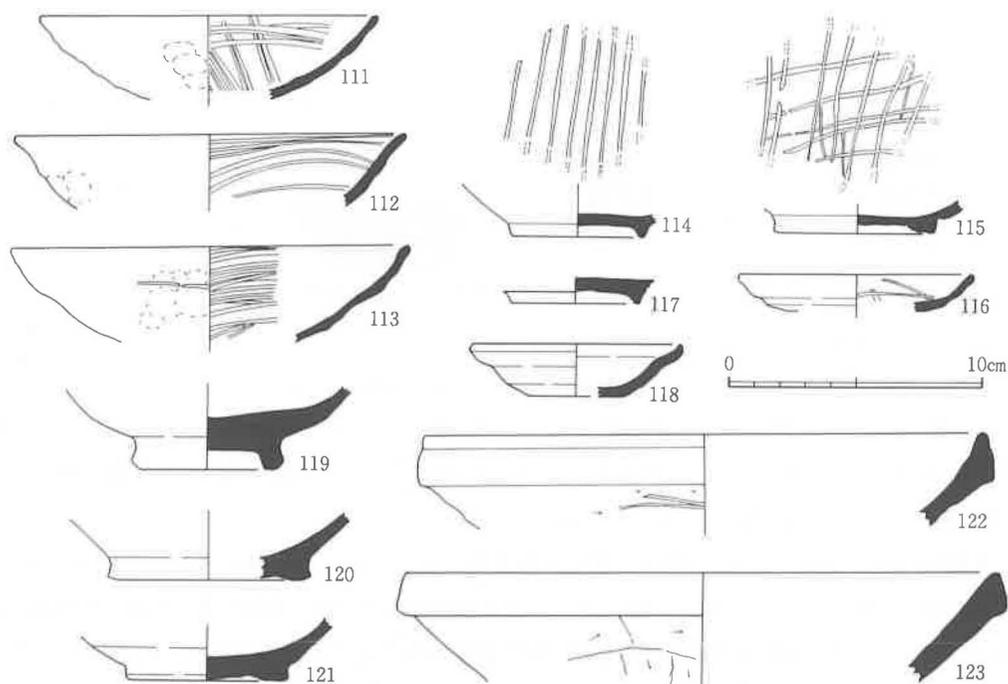
第12図 整地層内出土遺物実測図 一土器1—

を有す。口縁端部外面から内面全体に施釉。口縁部から底部の外面は露胎のまま。底部は糸切り。口縁径8.3cm、器高2.1cm。釉はオリーブ黄色を呈する。

瀬戸碗(125) 内面にはロクロによる回転ナデが見られる。外面は施釉し浅黄色を呈する。

常滑甕(124) 肩部片。外面は暗赤色を呈し、綾杉状の押印が見られる。

備前碗(121) 底部。高さ0.6cmの低い蛇目高台をもつ。内外面に自然釉が見られ、露胎部は灰オリーブ色を呈する。



第13図 整地層内出土遺物実測図 一土器2一

青磁碗(119・127・130) 119は底部で高さ1.2cmの丸みをもった高台をもち、明オリーブ灰色を呈する。高台端部から裏面は露胎。127は口縁部片で灰オリーブ色を呈する。130は竜泉窯系の体部片で外面に縦長の蓮弁文様を有し、明緑灰色を呈する。

白磁碗(120・126・128・129) 120は底部片で内面見込み近くに沈圈文があり、見込み部には多量の砂粒が付着している。内面は施釉して灰白色を呈するが、外面底部から高台は露胎。128・129は口縁部片。128は高い玉縁状をなし灰白色を呈する。129は段のよわい玉縁状口縁をなし明緑灰色を呈する。126は朝鮮系の白磁で、胎土は粗く灰白色を呈する施釉も雑である。底部外面は露胎。

瓦・金属製品(第14図 図版18)

文字瓦(131) 縄目のある平瓦凸面端近くに「王」篇と思われる漢字が刻まれている。

円盤状瓦製品(132) 平瓦を円形に打ち欠いて作ったもの。径4.3cm、厚さ2.1cm。

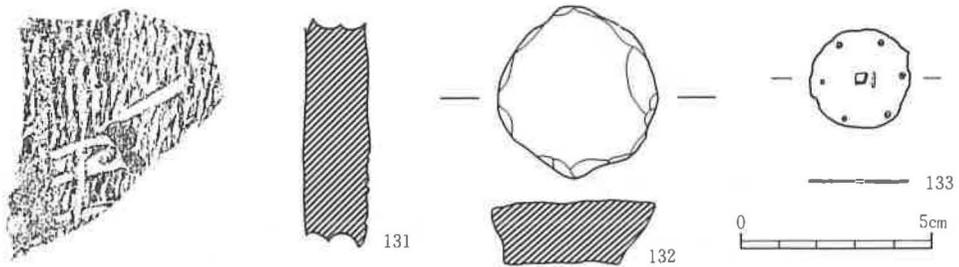
青銅製飾り金具(133) 径2.1cm、厚さ0.5mmで極めて薄く、周円部はほとんど破損している。中央に2.5mm四方の孔があり、6方向に留め金用の径1mmの円孔を配している。

(5) 溝埋土一第13・14層一

埋土は土質によって2層に区分した。しかし両層はほとんど同時期に埋め込まれたと考えられる。とくに第14層は多量の遺物を含んでいた。遺物は土師器皿・椀、土師質羽釜・甕、瓦器皿・椀、瓦質播鉢、須恵器、瓦などが出土した。

土器類(第15図 図版14)

土師器小皿(134~141) 小皿は褐D(136・140)、白E(134・135・137・138)、褐E(139・141)



第14図 整地層内出土遺物実測図 一瓦・金属製品一

とあり、白・褐色のE型式が主流をしめる。

土師器中皿(142・143) 中皿は白A(142)、褐F(143)があった。

土師器大皿(144~152) 大皿は褐B(151)、白C(144)、褐D(148)、白E(146・150)、褐E(147)、白F(145・149)とあり、白E・Fが多く出土している。152は8世紀代の皿で体部内面に斜方向のミガキが施されている。

瓦器皿(154・156) 154は平坦な底部から外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。内面にはやや粗いミガキを施し、見込みには並行線の暗文がある。155は丸みをもった底部からゆっくりと立ち上がり、口縁端部を内側に少し肥厚させて丸くおさめている。内面のミガキは極めて粗く、見込みには並行線の暗文がある。156は少し凹面の底部より外弯しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。内面のミガキはやや丁寧に施し、見込みには並行線の暗文がある。154・156は中皿、155は小皿。

瓦器椀(157~161) 体部は外反しながらゆるやかに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。体部外面ユビオサエ、内面粗いヘラミガキ。口縁部は強いヨコナデを施し、158はとくに強く端部は少し外に開いている。160・161には外面に少しヘラミガキを施している。157は底部のみで断面三角形の低い高台がはりつけてあり、見込み部には2重の円暗文が見られる。

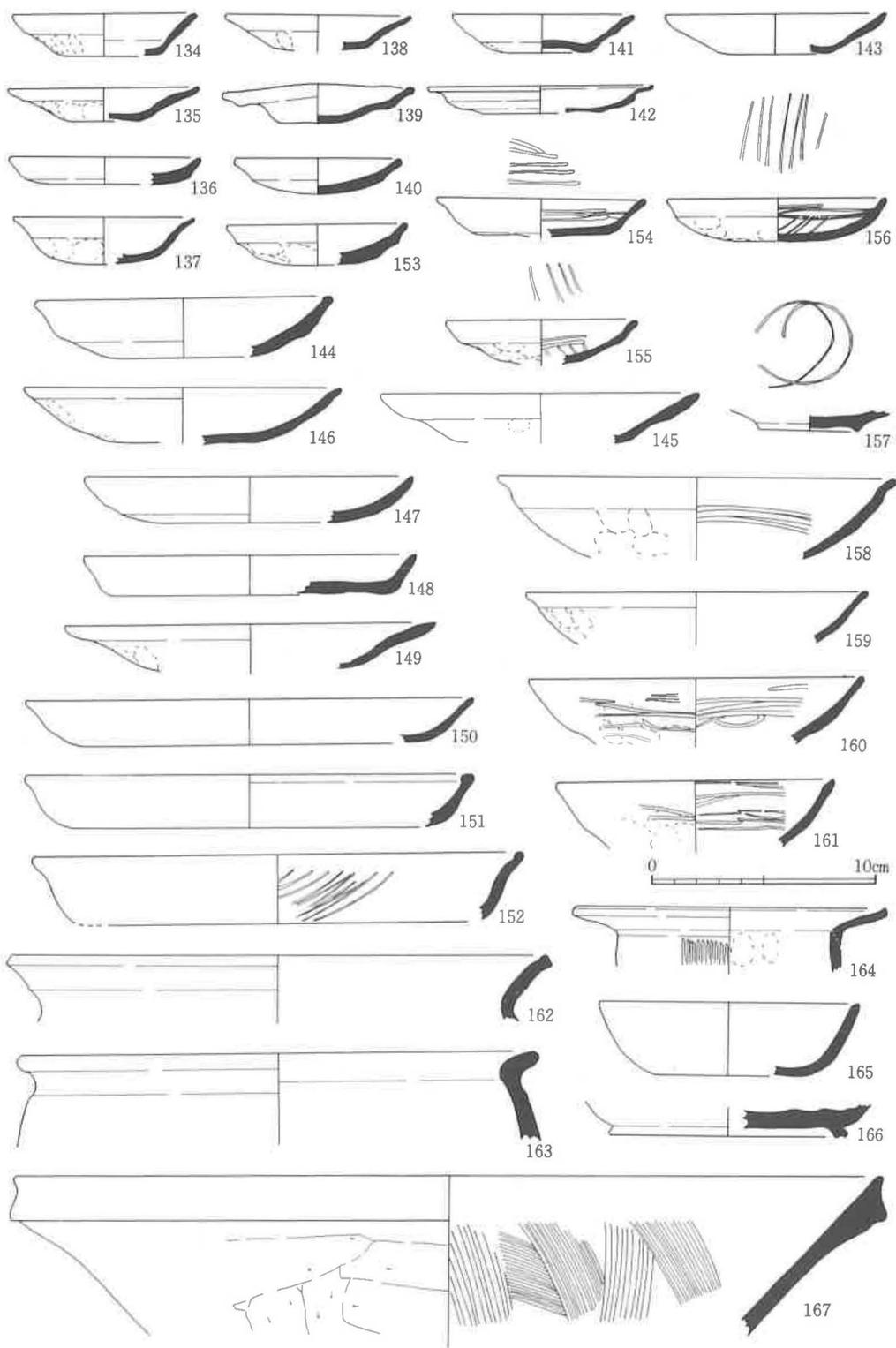
土師器甕(162・164) 162は口縁部片。口縁部は外上方に短かく開き、端部は内側へ折り四角くおさめている。内外面とも丁寧なヨコナデを施している。胎土は密で橙色を呈する。164は復元口径13.8cmの小型甕である。口縁部は丸みをもって内傾する体部から外上方へ大きく開き「く」の字状を呈する。端部は内側に折って段をなし四角くおさめている。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面には縦方向の楕円条線を施し、内面ユビオサエ。胎土はやや密で橙色を呈する。

土師器羽釜(163) 口縁部は内傾して丸みをもって立ち上がり、端部を外上方に開いて丸くおさめている。口縁部外面・端部内面はナデ、内面はユビオサエ。胎土は砂を含み粗く橙色を呈する。全体に磨滅が激しい。

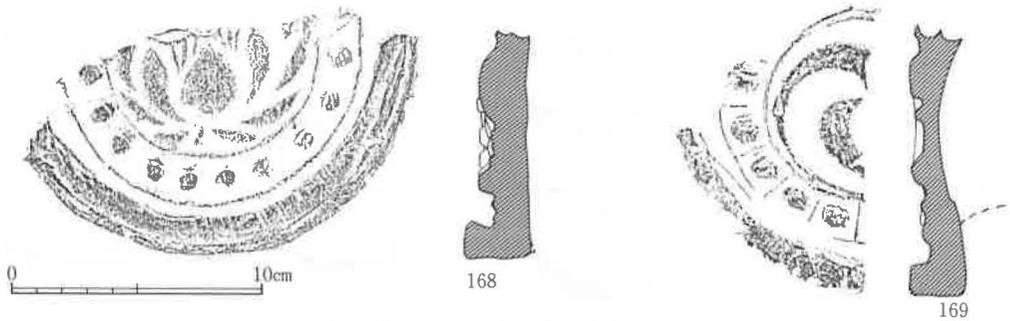
土師器椀(165) 浅い凹面をなす底部から外上方にすどく立ち上がり、端部をやや丸くおさめている。底部外面ユビオサエ。体部内外面ヨコナデ。胎土は密で橙色を呈する。

須恵器杯(166) 底部片。平面をなす底部に断面四角形の低い高台をはりつけている。高台部から体部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面ケズリ。焼成良、胎土は密で灰色を呈する。

瓦質播鉢(167) 片口をもつ播鉢で、外上方に大きく開いて立ち上がる体部から口縁部は段を



第15図 溝埋土内出土遺物実測図 —土器—



第16図 溝埋土内出土遺物実測図 一瓦一

有して少し内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめている。体部外面へラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面全体に浅い楕円条線が不定方向に施されている。胎土は砂・小石を含みやや粗く、オリーブ灰色を呈する。

瓦 (第16図 図版17)

瓦は軒丸瓦・平瓦・丸瓦が出土したが小片が多い。

蓮花文軒丸瓦(168) 内区に斜め上から見た蓮花を写実的に描いている。花卉は肉厚で丸みを持ち、中央に宝珠形の弁を置いて左右対称に配し、花卉上部に細い数本の葉を有す。外区は2本の圈線で画され、その中に高く大きい連珠を配している。周縁は高く、断面四角形を呈する。瓦当裏面はナデ、横位はケズリののちナデで仕上げている。

巴文軒丸瓦(169) 内区に左廻りの三巴を配す。巴は肉厚で起頭部を少し尖らせ、尾を長く延ばして界線としている。外区には圈線と放射方向の界線によって画された中に丸みをもった大きい連珠を配している。瓦当裏面は凹状をなし、横位ともナデで仕上げている。

(6) 下部遺物包含層一第16・24層一

第16層以下の層にはほとんど遺物は含まれておらず、溝の北肩をなす第16層より土師器皿、第24層の砂層から土師器などが出土しただけである。

第16層 (第17図 図版16)

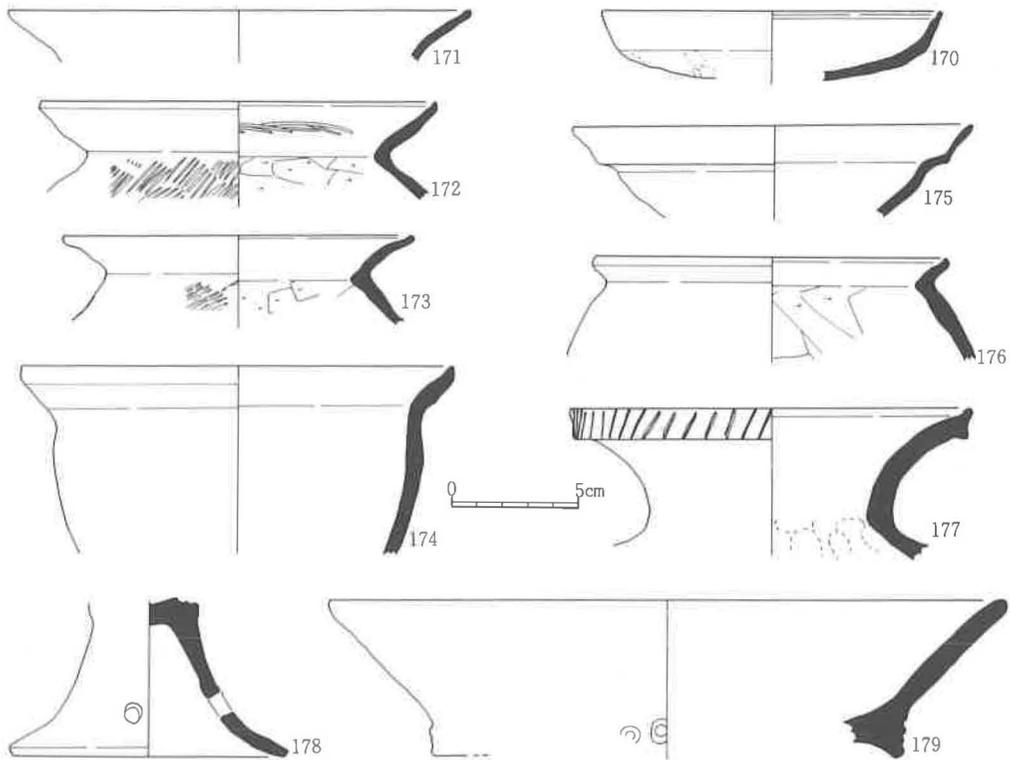
土師器大皿(170) 体部は丸みをもって底部から外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめ内側に段を有す。胎土は密で橙色を呈する。

第24層 (第17図 図版10)

土師器甕(171~173) 庄内式。「く」の字状に大きく外反する口縁部片。口縁端部は少しつまみ上げて内側に段を有すが、171・173はやや退化している。172・173は体部外面に細いタタキメがあり、内面はへラケズリを施している。口縁部はヨコナデ、172は内面に数条のへラミガキが施されている。171は褐色、172は浅黄色、173は灰白色を呈する。

土師器鉢(174) 体部は少し丸みをもって立ち上がる。口縁部は外上方に開き、端部を直立させやや尖らせておさめている。口縁内外面ともナデ。体部の調整は磨滅により不明。胎土はやや密で橙色を呈する。

土師器有段鉢(175) 体部はゆるやかに丸みをもって立ち上がる。口縁部はほぼ水平に開いて



第17図 下部遺物包含層内出土遺物実測図

段をなし、のち外上方へ立ち上がり端部をやや尖らせている。胎土は密で橙色を呈する。

土師器無頸壺(176) 丸みをもって内傾する体部から口縁部は「く」の字状に外上方へ開き、端部をつまみ上げている。口縁内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリ。胎土はやや粗くにぶい黄褐色を呈する。

土師器壺(177・179) 177、口縁部は大きく外反して立ち上がり、端部は面をなして内側に段を有す。面には浅い櫛描線と斜方向の刻目文を施している。口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ。体部内面ユビオサエ、外面磨滅のため不明確。胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈する。179、二段に外反する口縁部片。口縁部は頸部より平行に開いて面をなし、さらに外上方に立ち上がって端部を丸くおさめている。下部面には径2cmの竹管円形文が配されている。内外面ともナデを施していると思われるが、磨滅が著しく不明瞭である。胎土はやや粗く、にぶい褐色を呈する。

土師器高杯(178) 脚部。脚高はそれほど高くない。裾部は大きく広がり端部をやや丸くおさめている。4方向に0.7~1cmの円孔を穿っている。全体に磨滅が激しく調整は不明。胎土はやや密でにぶい橙色を呈する。

- 注 (1) 曾我恭子 「出土遺物」『神並遺跡I』東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会 1986年
阿部副治 「土師器」『若江遺跡発掘調査報告書I 遺物編』 (財)東大阪市文化財協会 1983年
(2) 稲垣晋也 「古瓦の様式と形式・型式」奈良国立博物館編『縮刷版 飛鳥白鳳の古瓦』1982年
(3) 間壁忠彦 「備前」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1977年

IV. 絵図より見たる若江城

現在の若江の地においてはまったく「城」の面影を見ることはできない。これまでも多くの人々によって研究され、城および城域の想定も行なわれてきた⁽¹⁾。しかし、それらは字名(城など)をもとにしてなされたものであり、かなりの部分が想像であったといえる。今日においても城の全貌を明確にすることは不可能であるが、今回若江地域の古絵図の存在を知り、発掘調査による考古資料なども増えてきたことから、おぼろ気ながらその姿をかいま見ることができるのではないかと思う。以下、古絵図を紹介し、のち若江城の城域の想定を試みたい。

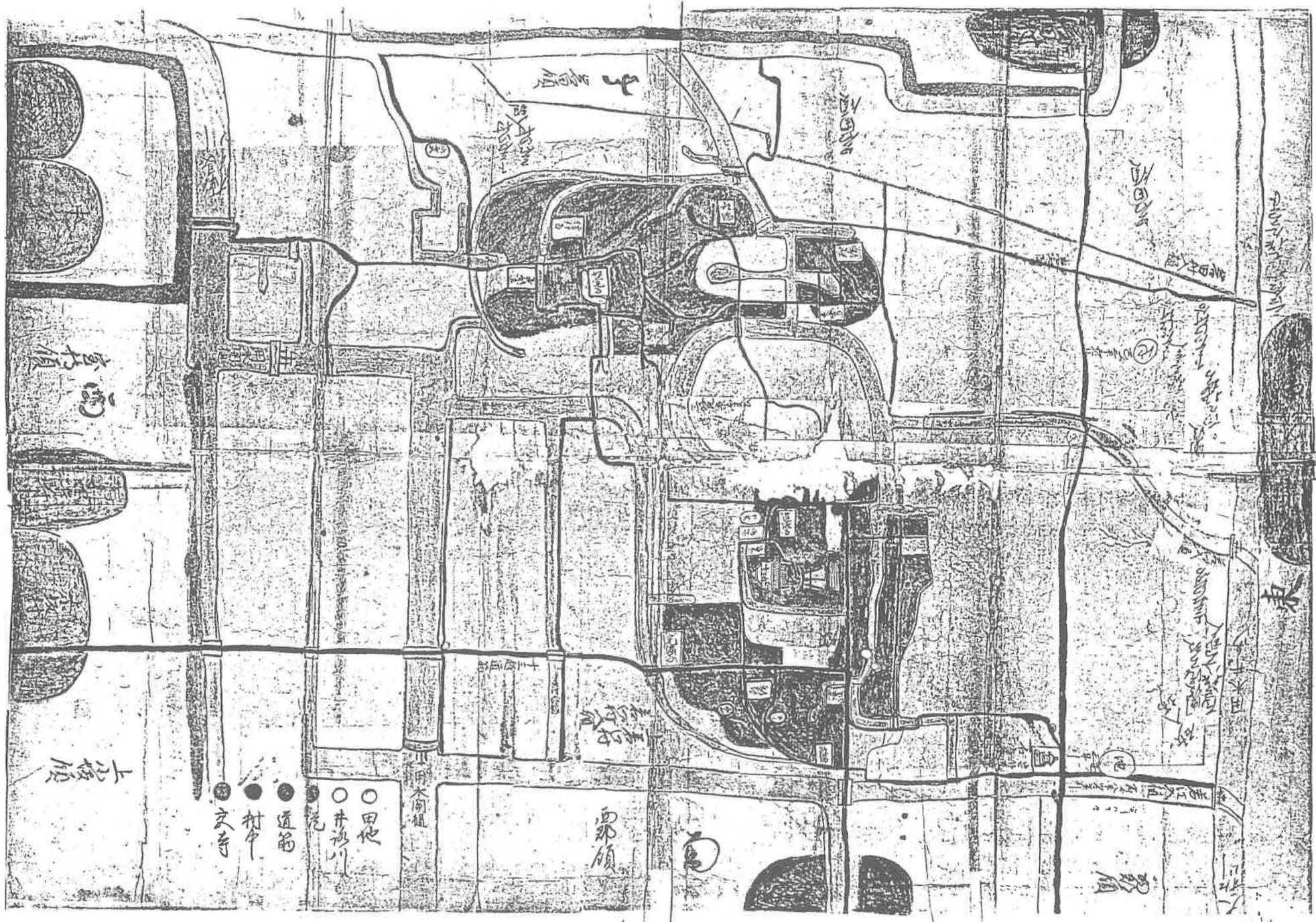
1. 飯田博一氏所蔵絵図

昭和57年12月に実施した若江南町地区を通る旧十三街道での下水工事に伴う第26次発掘調査⁽²⁾および本発掘調査の期間中、郷土史に関心を抱いておられる飯田博一氏は、幾度となく調査地を訪ねてこられた。その折、飯田氏より若江関係の資料をいくつか所蔵しておられるむねをお聞きし、後日飯田宅をお訪ねして資料を拝見させていただいた。その中にここに紹介する絵図が含まれていた。絵図原本は傷みが激しく全図を広げて見ることはできなかったが、飯田氏御自身、数年前に複写したものに原図どおり着色しパネル化しておられ、それによってゆっくりと観察することができた。この絵図は若江の旧家の一つである飯田家に代々伝えられてきたものと思われるが、飯田家の方々においても近年までその存在を御存知なく、10数年前、仏壇を移動・整理されたときに博一氏が発見されたものである。

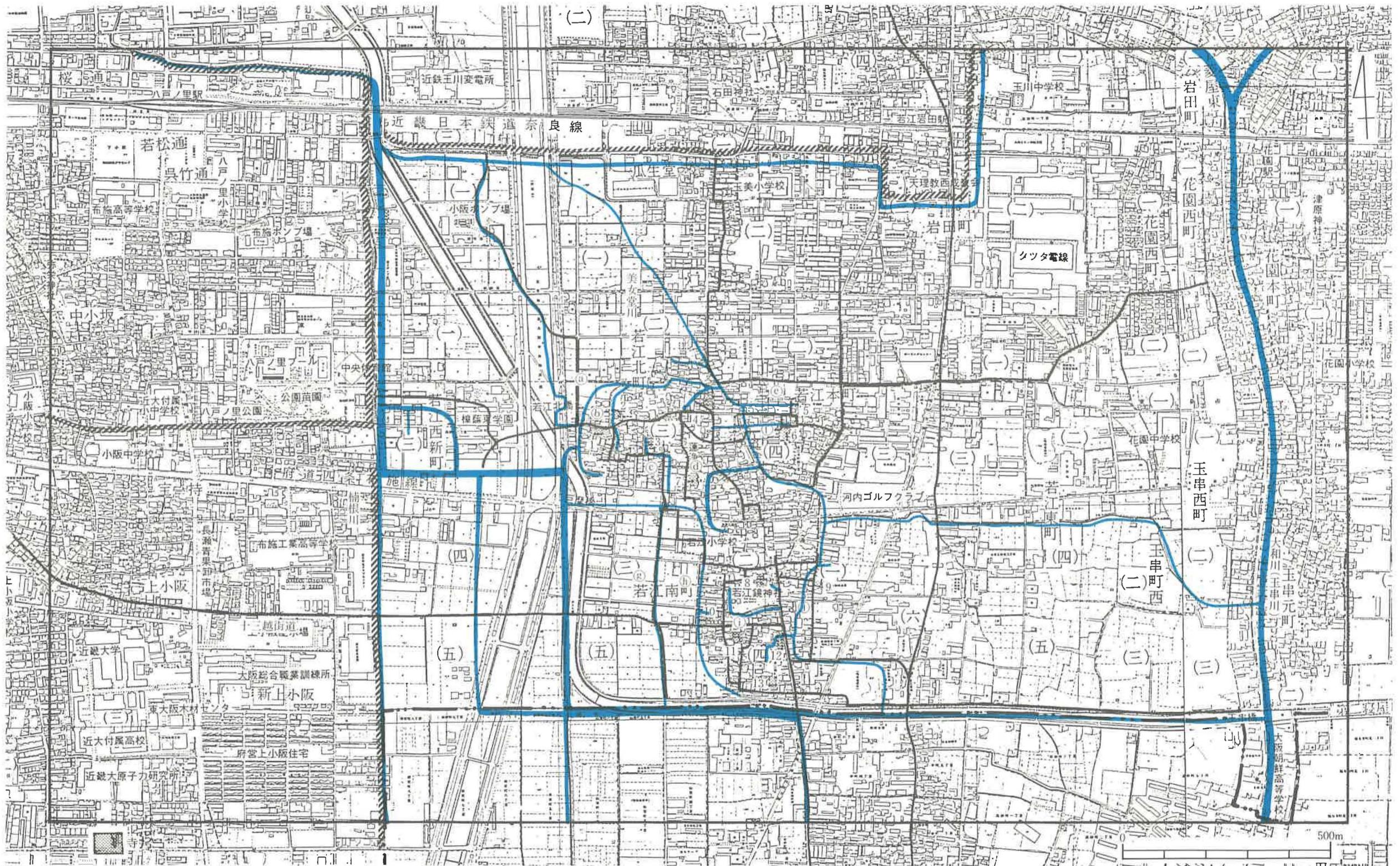
(1) 絵図の性格

絵図は上直紙4枚からなっており、全部をつなぎ合わせると縦50.2cm、横73.2cmの長方形となる。その中に東西南北を記し、東は玉串川(大和川)周辺から西は楠根川周辺までの約3km、南は現在の第2寝屋川周辺から北は岩田川周辺までの1.8kmの範囲が描かれている。しかし村中(居住地域)をくわしく、大きく描いているため、実際の距離間隔では紙面に入りきらない。そのため四方、とくに北・東側の田地・川などを縮めて作成している。すなわち若江の村中部分東西約1kmが32cmであるのに対し、東側1kmを19cmに、同じく村中部分南北0.8kmを32cm、北側0.8kmを8cmに描いている。文字の記入については周辺部の多くのものがそれぞれ中央から四方に向けて記されているが、細部のものなどには方向性はない。

絵図には大和川(玉串川)、楠根川をはじめとする水路、十三越道筋などの道路、各村の村中、堤、田地などが色別して描かれており、塚本宮と書かれた若江鏡神社、蓮浄寺、蓮城寺、薬師堂(寺)、信行寺などの宮・寺があり、山口伊豆守殿石塔とともに三好左京大夫殿城跡として若江城跡が記されている。この中には現存しない妙覚寺、光源寺、良法寺と浄土真宗の道場4ヶ所、宮4ヶ所も記している。道場は下若江村・上若江村各2ヶ所あり、1ヶ所は未確認であるが、3道場はのちに寺となっている。すなわち『若江村郷土誌』などによると下若江村中央の道



第18図 若江・村絵図



第19図 絵図の現地図への復元図

- 1. 薬師堂(寺) 2. 信行寺 3. 妙覚寺 4. 道場(浄教寺) 5. 道場(宗仙寺) 6. 長寿寺 7. 蓮浄寺
- 8. 蓮城寺 9. 明德寺 10. 光源寺 11. 道場 12. 良法寺 13. 道場(恵浄寺)

場は浄教寺(字 今井)、東側は宗仙寺(字 見郷)で、上若江村南端の道場は恵浄寺となる⁽³⁾。周辺の村としては西に下小坂・中小坂・宝持・上小坂、南に西郡、東に市場、北に岩田がある。若江も上若江・若江・下若江に分れており、この状態は正保3年(1646)から明治19年(1886)まで続いていた。絵図は村中、道、寺社、水路などを色別して描いていること、居住地域をくわしく記すため大きく描き周囲の田地部分を縮めて書いていること、北を上にするという規定が明確でないことなどから見て、江戸時代の典型的な村絵図⁽⁴⁾といえる。ただ若江という土地柄からして、川をはじめとする水路がくわしく描かれ、樋(入樋・用水開樋)の場所が明記されている。また堤構築のこと、年貢に関することが書き加えられている。前者は大和川沿に堤を構築するにあたり、下若江・若江・上若江の3村で分担し、南側148間2尺を上若江村分、北側の239間1尺を若江村分・192間を下若江村分としたと記している。また後者は現在の第2寝屋川東端部に「寅より8升4合差引」、同川沿の池(留池)に「丑より3升引」とあり、他に美女堂川と2ヶ所の池にも同内容のことが書かれている。これは川や池の存在(改修や構築などに伴い)によって、寅・丑などそれぞれの年より年貢を記した分(8升4合・3升など)だけ差し引くことを明記したものである。このようにこの絵図は用水図の要素を濃く含んだ村絵図といえよう。

(2) 絵図の製作年代

この絵図に描かれている社寺、石堂、村名、川、用水井路などを手掛りとして、それぞれの創立、建立、廃絶年代、開削年代等を検討することにより製作年代の推定を行ないたい。

絵図に書かれている村名が「上若江村、若江村、下若江村」となっている。『大阪府全志』⁽⁵⁾によれば「本地は古来若江郡に属し、もと巨麻郷にして、後、若江村と称せしが、正保3年分れて若江・上若江・下若江の三ヶ村となり来りしも、明治19年2月復た合して更に若江南・若江北の両村となれり」とあり、この村名となったのは正保3年(1646)以降明治19年(1886)までの間であることがわかる。

社寺をみると、塚本宮、信行寺、薬師寺、妙覚寺、蓮浄寺、長寿寺、蓮城寺、明德寺、光源寺、良法寺、道場が描かれている。大部分の寺院は創立年代が不明であるが、『大阪府全志』に蓮浄寺は「慶長2年(1597)5月20日の創立、正円の開基なり」と、明德寺は「明治28年11月6日同字の641番地より今の419番地に移転せり。」と記されている。『若江村郷土誌』⁽⁶⁾に「蓮城寺(日蓮宗)若江南鏡神社ノ社前ニアリ開基創建詳ナラズ正保元年(1644)焼失シタルヲ以テ承応二年(1653)真言宗僧道心ナルモノノ再興ニカカル其後更ニ頽廢ニ歸シタリガ元禄六年(1693)京都順妙寺十五世隠居蓮性院日相上人ノ再建シタルモノニシテ順妙寺ノ末派ナリ」⁽⁷⁾「明覚寺・日蓮宗末寺ニシテ延寶五年(1677)三月廿八日撰津国大阪天満末広町蓮興寺五世大徳開基創立」とある。『河内萱振城』⁽⁷⁾の中に、真宗寺院恵光寺を支えた村寺と村人を一覽したと思われる横長帳の記載がある。史料は年号、表題はないが、江戸後期のものと推定されており、ここに若江地域の願生寺、恵浄寺、光源寺、明德寺、蓮浄寺、崇信寺、信行寺、浄教寺が書かれてある。これらの社寺からみれば、この絵図は明(妙)覚寺が描かれていることから延寶5年(1677)以降のものである。

山口伊豆守殿石堂は山口伊豆守重信の碑で『河内鑑名所記』⁸⁾に「大坂軍五月六日ほのほのに、木村長門守と合戦して敵数多打、終に打死の所也。其後舎弟山口但馬守弘隆爲重信碑を立。」とある。重信は元和元年(1615)5月6日、大坂夏の陣で徳川方の井伊直孝15,000の軍勢の先頭隊として大坂方木村長門守重成5,000の軍勢と若江の地で戦い、重成の槍で突かれ、戦死した。年26であった。碑文によれば、弟山口但馬守多多良弘隆が重信の33回忌にあたる正保4年(1647)5月6日にこれを建てたとある。この碑の南、川の対岸に木村重成の墓がある。重成は井伊氏の先頭庵原助右衛門朝昌と槍を交えて戦死。安藤長三郎首級を挙げる。重成の墓碑は若江西村家文書⁹⁾によれば、重成の150回忌に当り、重成の首を貰うけた彦根藩士安藤長三郎重勝七代孫次輝が、その菩提を弔うためにここに墓碑を建てたものである。宝暦14年(1764)のことである。しかし、この木村重成の墓は絵図には記されていない。このことから考えれば、この絵図は宝暦14年(1764)以前に描かれたものと思われるが、木村重成の墓碑は西郡村に属しているため描かれなかった可能性もある。

川、用水井路では、現在の玉串川が大和川とかがれている。大和川は宝永元年(1704)に柏原市の石川合流点付近から真西に開削され堺市の北方で大阪湾にそそぎ込むが、それ以前には北ないしは北西方向に恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川と河内平野を分流して流れていた。付替後は旧河床、池床を田地に開発した新田が多くできた。この絵図でも市場村にあたる場所に玉井新田が開発されるがこの絵図にはその記載がない。この点から考えればこの絵図は宝永元年以前のものであると思われる。

以上のことから考えれば、この絵図は明(妙)覚寺が創建された延寶5年(1677)から大和川が付替えられる宝永元年(1704)の間に描かれたものと考えられる。

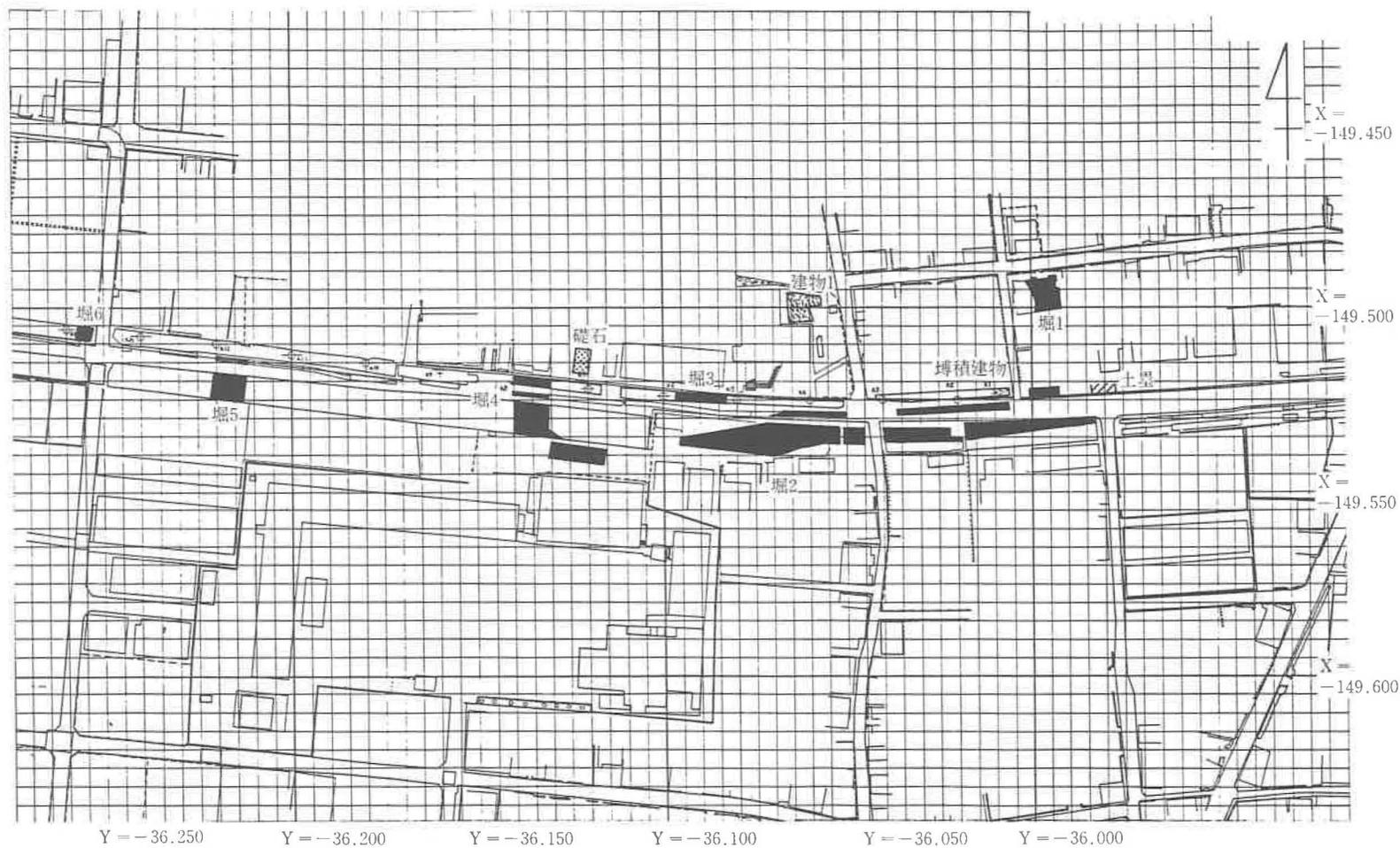
2. 絵図などからの城域復元の試み

昭和62年度までで若江遺跡の調査は34次を数える。これらの調査において若江城に伴うと考えられる遺構・遺物を数多く検出している。また若江地域の小字の中には「城」など城に関係するものがいくつか見られる。近年、各地の遺跡で地中レーダー探査による遺構の推定方法が試みられており、本遺跡においても昭和61年6月・8月、12ヶ所について実施した。それに伴い昭和17年の航空写真より作成した微高地区分図(第22図)¹¹⁾などもある。以下、村絵図をもとにして発掘調査結果、字、文献史料、地中レーダー探査結果、古地図、航空写真などによって城の城域および周辺地域の想定・復元を試みたい。

(1) 城関連の遺構

これまでの発掘調査で、15・16世紀代の遺構は堀、建物、溝、土塁などを検出している。¹²⁾

堀 現在までのところ東西に走る堀1本(堀1)と南北に延びる堀5本(堀2～6)を確認している。堀1は府道大阪東大阪線に沿うようにして東西に延びており、西は若江小学校正門西寄り、東は若江南公園西寄り、北は若江小学校正門西寄りで北へ方向を変え(堀4)、東側も若江南公園西寄り、北は若江小学校正門西寄りで北向きに延びている(堀2)。この堀の東西長は約160m、幅10～15m、深さ2m前後を測る。底面はほとんど凹凸がなく、北肩およ



第20図 発掘調査検出遺構図

び南肩は2～3段に掘られていた。第20次調査部分では逆茂木と考えられる木杭群を検出し、第24次調査区では多量の瓦とともに壁下地が出土した。この堀は16世紀中葉から後半にかけて存続した。

堀2は第14次の調査で検出した堀1東側より北へ延び、その東肩部には土塁が築かれていた。この堀は幅16m、深さ2.5m以上を測り、15世紀中頃から16世紀後半まで改修し、縮小しながらも存続しつづけた。

堀3は堀2より西約80mに位置し、堀1から北へ延びるものである。この堀は幅12m、深さ1.5mを測り、東肩はやや急で両肩とも3段に落ちている。堀内からは瓦（鬼瓦・鯰瓦・飾り瓦など）とともに多くの金属製品（釘・かんざし・刀子・鏃・貨銭など）と木製品が出土し、焼土・炭と焼成をうけた遺物を検出している。16世紀代の堀で、同後半には埋没。

堀4は堀1西端から北へ延びるもので、幅10m以上、深さ2mを測る。堀内からは多量の瓦とともに壁下地・礎石などが出土している。16世紀代の堀。

堀5は堀4より西72mに南北方向に走る堀。幅10.34m、深さ1.5mを測り、両肩はゆるやかに落ちて底面はやや丸みをもつ。室町時代末期（16世紀後半）から江戸時代中期まで存続。

堀6は堀5よりさらに西33mに南北方向に延びる堀。西肩は3段になっていたが、東肩は調査地外になり不明。幅は調査地内だけで3.4mを測り、推定全長は6mを越えよう。深さは1.33mを測り、堀内からは多量の瓦と土師器・瓦器・陶磁器などが出土した。16世紀後半に埋没。

建物 今回までの調査で掘立柱建物・礎石建物・塼列建物を検出している。

掘立柱建物、礎石建物は若江幼稚園周辺で検出している。掘立柱建物は16世紀後半の1間1.6mの柱穴列（5個）であった。礎石建物は1間1.9mの2列の石組（根石）で、室町時代末期のもの。ともに調査地が限られていたため正確な規模は不明。幼稚園の南側の歩道橋基礎部より16世紀後半の長辺2.1m、短辺0.95m、厚さ0.35mの礎石が原位置を保ったままで出土し、堀の埋土内からも礎石が出土している。

塼列建物は2ヶ所で検出している。第27次調査で27×25cm、厚さ2.5cmの塼を東西5m、南北1.2m以上に立て列べたものを検出し、出土遺物などから16世紀末以降のもの。第5次調査の塼列は東西に列べたもので、堀2埋没後のものか。塼列建物は城廃絶後のものと思われる。

このほか、15・16世紀代の遺構としては石組の溝・溝・井戸・土壇なども検出しており、当時の生活様式を知ることができるが、部分的な調査であり城との関係は不明である。

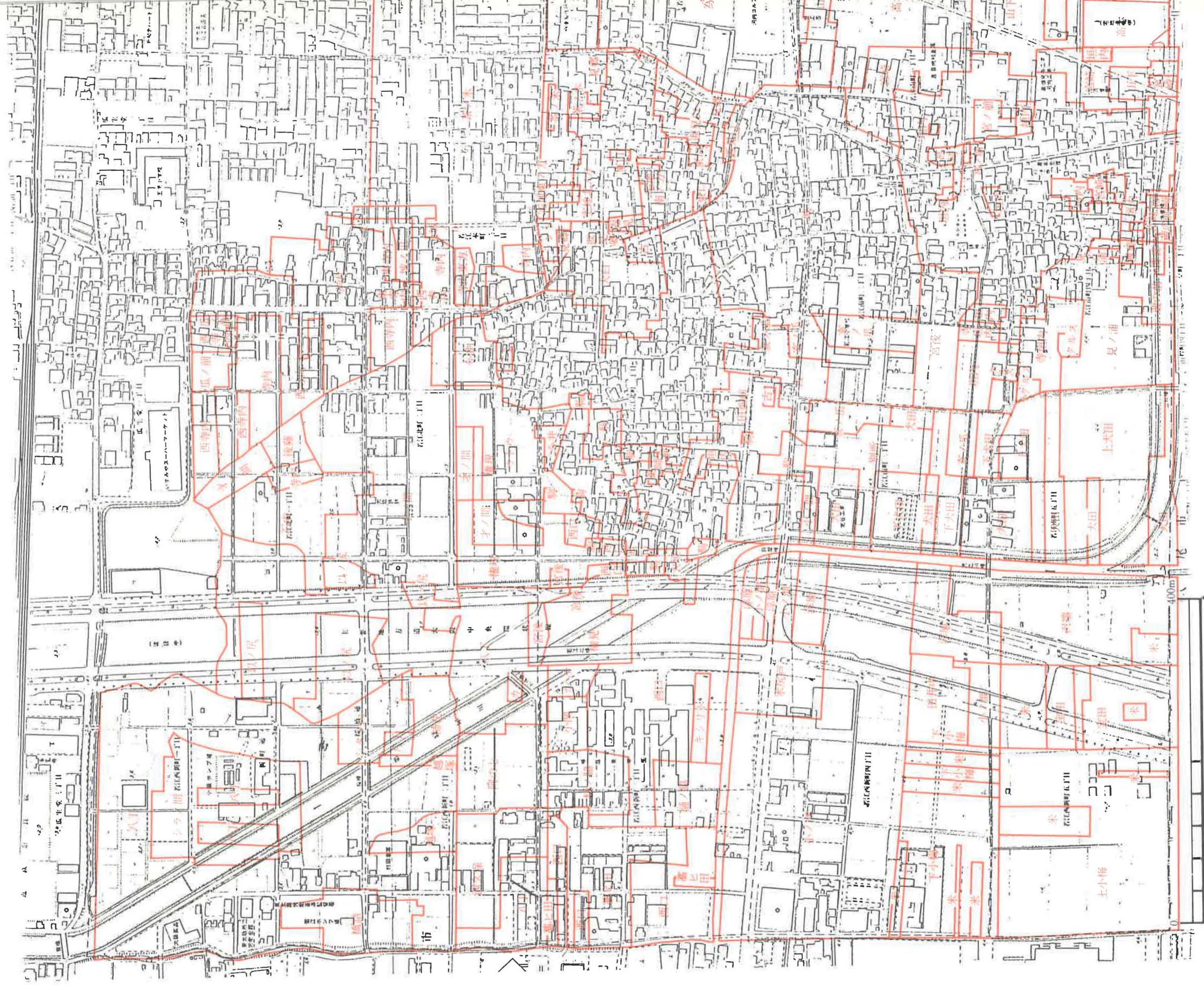
以上のことから、現在の若江幼稚園・若江公民館を囲むように堀があり、その付近から建物跡を検出し、15・16世紀代の種々の遺物が出土していることなどから、この場所が城の中心地であったことを裏付けている。

(2) 若江地域の小字

近年、字を記した地籍図をもとにしての研究で、幾多の発見・確認がなされてきた。字名などの地名は、人をして「大地に印された史料」といわしめるほど、歴史研究に大きな役割を果たしている。城郭関係でも地籍図を使用しての研究が最近とくに注目されている。たとえば桑原



第21図 若江地域小字図



第21図 若江地域小字図

公德氏の長岡京市勝竜寺城の復元、小和田哲男氏の静岡県内の城館跡の研究⁽¹⁴⁾などがある。

若江地域の小字調査は古くから多くの人々が試みてこられた⁽¹⁵⁾。今日、若江およびその周辺地域の字切(字限)図の正確なものは現存していない。そのため今回は「明治23年1月1日現在調土地台帳」(若江北8冊、若江南7冊 法務局枚岡出張所)より字名およびその地番を抽出し、中市税事務所にある「正本 換地説明書」の若江地区の部分より調べた字一地番とを照合して、それを地籍図一1/5,000東大阪市地籍図 中地区南部一に落として字切図を作成した。現在の地籍図には河川の付け替え(昭和9年、第二寝屋川)や土地整備などによって地番変更された場所一とくに若江地区の西側、第二寝屋川沿一があり、法務局の公図(地番地図)、明治20年8月編纂の「大阪府河内国若江郡若江南村全図」(中市税事務所)および故湯村平三氏の研究資料⁽¹⁶⁾などによって旧地番を確認した。しかし若江地域の居住区内をはじめ字名の不明な所があり、今後も調査を進めたい⁽¹⁷⁾。

そこで字名を見ていくと興味あるものがいくつかみられる。越塚・砂子塚・石塚などの塚名、寺内・寺垣内・権現・宮ノ前などの寺社関係名などもあり、今後の文化財調査の手掛りとなろう。以下、主要な小字名を北若江と南若江に分けて取り上げ、若干の解説を記して若江城の城域およびその周辺地域の復元の糸口としたい。

<北若江>

城の川 字「城」の北限より北390m付近に2ヶ所あり、城を守る北限の川か。この地は現在の若江本町二丁目地内にあたるが、川は現存しない。しかし西の若江北町二丁目から若江西新町二丁目にかけて東西に延びる水路が現存しておりこれと継がるものか。絵図には描かれていない。

石成 三好三人衆の一人、石成友通と関係するか。

大白 ダイウスと読み、ゼウスの当て字といわれる。若江三人衆の筆頭・池田丹後守教正が建てた会堂⁽¹⁸⁾があった場所か。若江南町にも「クルス」がある。

西口 大坂方面から下若江の村中(居住区域)に入るあたりに散在し、城への入口の一つ。大坂方面(中小坂村)へ向う楠根川を渡る所には「橋詰」がある。

大垣(大カキ) 西口と同様下若江村の入口部にあり、垣・柵などの防御施設があったか。

駒 軍馬などの馬をとめおいた場所か。

東口 高野街道から下若江村に入った所に点在。城への入口の一つ。

返見口 見郷・返見郷という字があり、古くから城への入口の一つと考えられていた。本城への入口か。

<南若江>

城 これまで若江城を想定復元するときのものになってきた字名。しかしこれまでその範囲は不明確であった。若江のほぼ中央に位置し、現在の府道大阪東大阪線を挟むようにしてある。南限は東大阪市立若江小学校の南を東西に走る道の南寄りであり、東は美女堂川を限りとしている。南北250m、東西の南辺380mを測る変形の台形状をなす(西北部・東南部を欠く)地

域である。この範囲が城の主要地域と考えられる。絵図の「三好左京大夫殿城跡」と記された範囲と重り合う。

寺垣内 垣内とともに絵図に見える光源寺(現存しない)の寺域か。『大阪府全志』などに若王寺・光蓮寺が寺垣内にあったとあり、その寺域か。若江寺の存在した所ともいわれるが不詳。付近の発掘調査で古代から中世に亘る瓦が多数出土している。¹⁹¹⁾

宮崎・宮の前・宮ノ後 式内社若江鏡神社周辺の字名。

クルス 若江の南地域でのキリシタン関係の会堂などがあった所か。

その他絵図との関係で「樋尻・上樋尻・久保の樋尻」が現存しない入樋の場所を示し、「堤下」は若江の各村が分担して構築した玉串川の堤の西側にあたる。

(3) 城域などの復元

絵図を見ると中央部に「三好左京大夫殿城跡」と記し、水路で囲まれた地域がある。城は1580年ごろ廃絶したといわれ、⁽²⁰⁾建物を移築(八尾城)あるいは取りこわし、一部の堀を埋めたとされる。しかし、この絵図が作成された江戸時代前期にはまだ堀割などの名残りが十分に見られる。南側は破損しているが、発掘調査からこのあたりに(府道大阪東大阪線沿)東西に走る堀と南北に延びる堀を検出しており、堀で囲まれたこの部分が城の中心部にあたると思われる(I郭一本丸)。その規模は幅10~16m、深さ2m以上の堀によって画された一辺約140mの方形をなし南堀(堀1)中央西よりに北へ延びる堀(堀3)を設け、郭の一部をさらに画していたものと思われる。

内部の建物については『信長公記』に、三好義継の三家老が信長に寝返り、

佐久間右衛門を引入れ、天主の下迄攻む、逃候処叶ひ難く思食し、御女房衆、御息様皆さし殺し切出、余多の者に手を負せ、其後左京大夫殿腹十文字に切、比類なき御働き、哀なる有様なり。

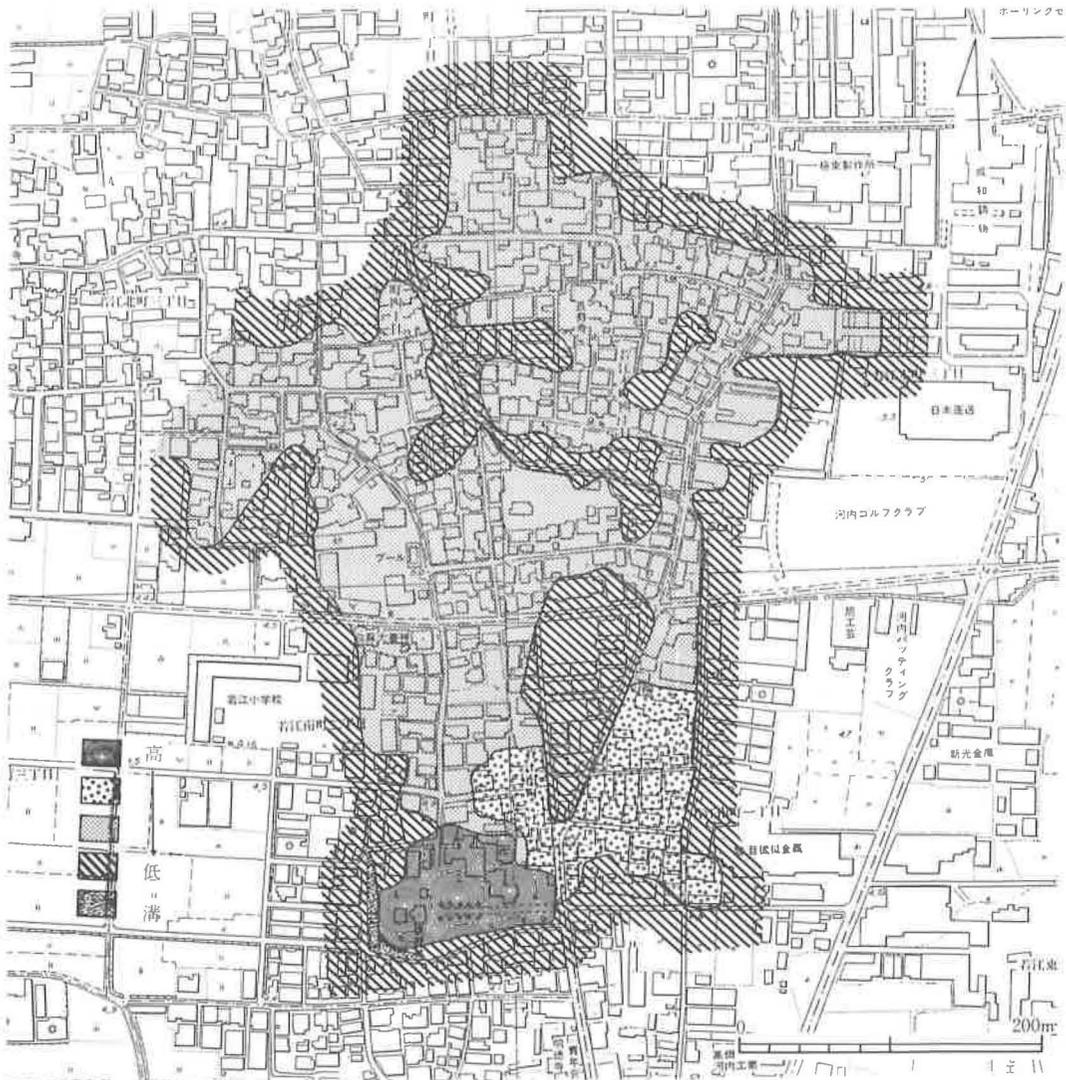
とあり、天主(守)があったことが記されている。確かに多量の瓦の中に鯨瓦があり、2.1m×0.95mの長方形の大きな礎石も検出していることから大規模な建物の存在を想定できるが、天守にあたるものかどうか裏付けるものはない。その他の建物についても発掘調査で堀立柱建物・礎石建物の存在を確認しているが、その規模・構造などは不明であり、その一端を知るにすぎない。第24・27次調査で堀内より多量の瓦とともに壁下地が出土しており、I郭の周囲は瓦を葺いた築地塀がめぐらされていたと考えられる。堀埋土内より漆喰を少し検出しているが、壁下地周辺にはまったく見られないことから、建物の一部は漆喰による化粧を施していたかもしれないが、ほとんどは土壁のままではなかったかと思われる。I郭への入口(門)の場所は東あるいは南にあったと考えられる。南堀内より橋に伴うのではないかとと思われる木杭を検出していることから、南に面していたのかもしれないが不明である。

I郭をめぐる堀は一部(東北隅)美女堂川を利用している一堀内に水を引くためかーが、ほとんどは素掘りのもので、堀には石垣を使用していなかったようである。幅は場所によって異なるが10~16mを測り、深さは2.5mを越えていたと考えられる。底面はほとんど平坦で少し水を

たたえ、内側は2段、外側は2～3段の階段状をなし、逆茂木などを備えていたと思われる。
『長祿寛正記』 長祿4年(1460)10月10日の条に

四方ハ皆深田ナリ。口ニツニ拵ヘ所々ヲ掘切テ搔楯ヲカキ。逆茂木ヲ引待カケ。
と畠山時代の記事ではあるが、その存在を記している。⁽²¹⁾

I郭の周辺地域について想定するのはより困難である。とくに北地域については発掘調査がほとんど行なわれておらず、資料が不足している。そこで絵図と地籍図から復元するとI郭の東側・美女堂川筋、南側・若江鏡神社の北、西側・堀6(水路⑥)に囲まれた東西380m、南北210mの逆L字状の地域—地籍図の字「城」の東・南部—をII郭(二の丸)と考えたい。この地域内での発掘調査は第1次調査をはじめ6次の調査が行なわれているが、15・16世紀代の遺構は井戸・溝などだけで明確な建物跡を検出していない。ただし西端の堀6内から多量の瓦が出土してお



第22図 若江地域微高地区分図

(国際航業 作成より)

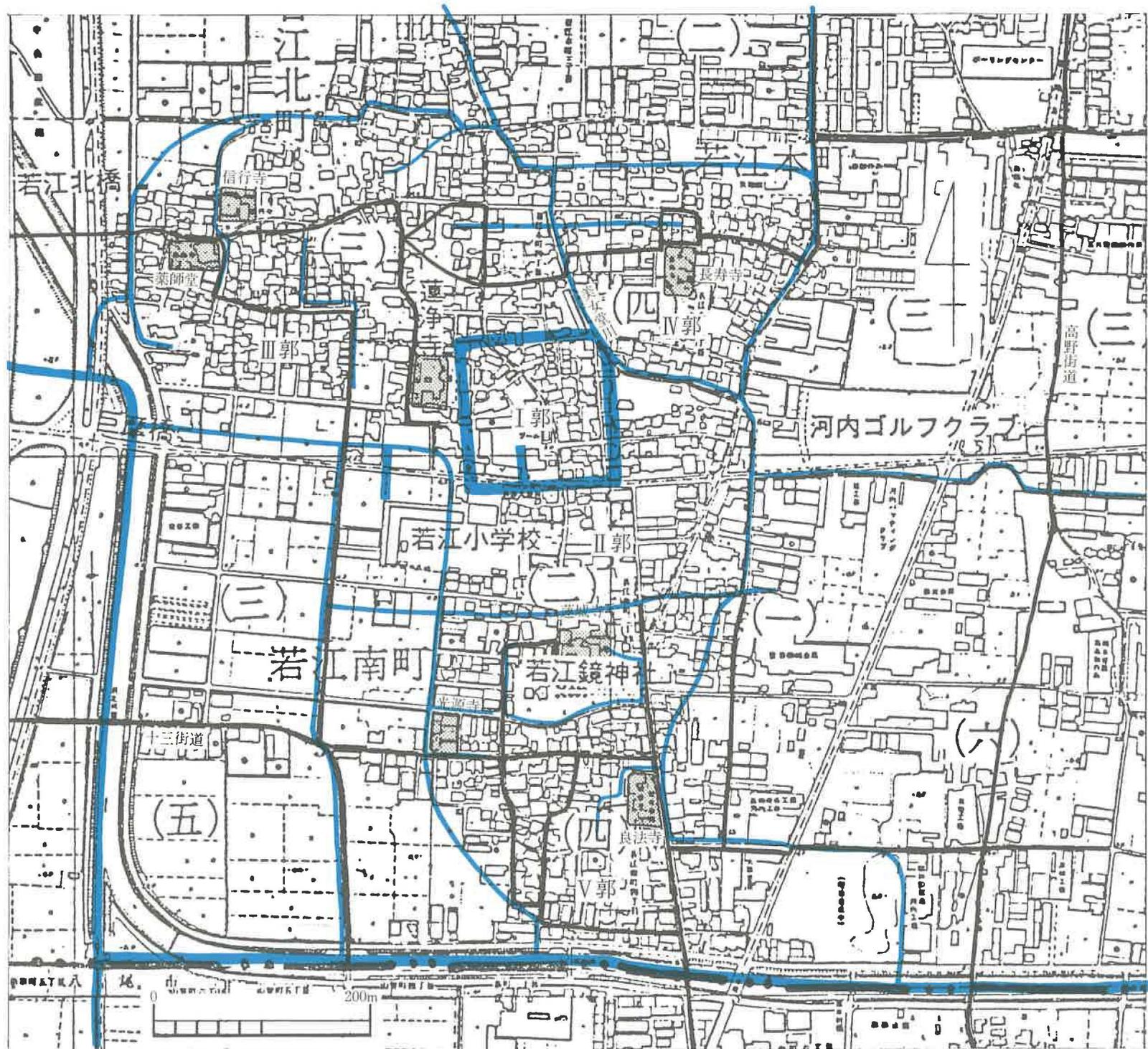
り、堀5とに挟まれた一画に瓦葺の建物があったことが想定できる。南端付近ではこれまで現在の道路上で第8・15次と下水管埋設に伴う調査を実施しているが、堀などの郭を限る遺構は検出しておらず、道路上でのレーダー探査でも溝などを確認できなかった。しかし地籍図では城一宮ノ後などと明瞭に分れ、その界線が道路よりさらに南に位置することから、ここをⅡ郭の南限とし堀などの防御施設があったと考えたい。Ⅰ郭の西・北地域では後述する外郭(Ⅲ郭・Ⅳ郭)以外にⅡ郭に相当するような郭は見られない。ただ絵図の下若江村中内(Ⅲ・Ⅳ郭)には水路一水路㉔・㉕・㉖などがあり(現存しない)、これらが防御用の堀としての役割を担っていたと思われる。Ⅱ郭への入り口としては、南の若江鏡神社の参道前を北上して入り口、北西部の蓮浄寺の南から入り口、北東部の字「返見口」から入り口の3ヶ所があったと考えられる。

以上のⅠ・Ⅱ郭は本来の政治的な意味での城と考えられる。さらに軍事的・経済的性格を含めた城としてはⅠ・Ⅱ郭を挟む外郭(Ⅲ～Ⅴ郭)があり、それぞれ村中(居住区)を取り入れて形成していた。Ⅲ・Ⅳ郭はのちの下若江・若江の村中を囲み込む形でつくられており、Ⅲ郭は薬師寺の西側の堀(水路㉗)から美女堂川までの東西約400m、南北約320mの範囲で、その中に4条の水路(堀切)が走っている。Ⅳ郭は美女堂川から旧の河内街道までの東西約250m、南北約200mの変形の五角形を呈する地域で、Ⅱ郭へ入る返見口があり「返見郭」とでも称すべきもの。Ⅴ郭は若江鏡神社を含む旧の上若江の村中を囲み込んで形成されており、Ⅱ郭の南端から現在の第二寝屋川までの南北約330m、東西(水路㉘～㉙)約200～370mの長ぐつ形を呈する。

これらのことから、若江城は5郭から形成されており、城郭は南北760m、東西630m(北)～370m(南)の規模であったと考えられる。これは平山城ではあるが、若江城とともに河内の守護所であった高屋城の規模に匹敵するものである。前述したように政治的に中心的役割を果たしたのは主郭(本丸)であるⅠ郭とその東南部に位置するⅡ郭(二の丸)であり、地籍図の「城」の範囲がほぼそれに相当する。

最後に若江城全体の防備について若干述べておきたい。若江地域を巨視的に見ると若江鏡神社からⅠ・Ⅱ郭を含む城域はその周辺地域にくらべてわずかに高く、微高地を形成している。このことは第22図の航空写真よりの微高地区分図からもうかがうことができる。『長祿寛正記』などにも「四方ハ皆深田ナリ」と記され、字でも浮原・沢端・長沢・薄池などがあり、当時の城域の周辺地域が湿地帯であったことを知ることができる。また東に玉串川、西に楠根川、北に岩田川(仮称)、南に現在の第二寝屋川が走り、若江地域が完全に川で取り囲まれている。このように若江城は標高5mという平地に築かれた平城であるが、四方を川に囲まれ、城の周辺が深田一湿地帯であったことなどから自然の要害の地に設けられた城である。

当時の若江およびその周辺を走る幹線道路としてはⅤ郭を通る十三街道と城域の東方を南北に走る高野街道があった。のちこの高野街道はなくなり、江戸時代中期以降河内街道と呼ばれる岩田からⅣ郭東端を通り、Ⅱ郭を斜めに貫ぬき若江鏡神社の参道前の道と重なり西郡の中ノ辻を経て八尾へ向う道になる。高野街道は岩田から西郡北ノ辻まではほぼまっすぐに通っており、その道から若江城(Ⅳ郭・Ⅴ郭)へ通じる西への2本の道が延びていた。この道からの入口を含



第23図 若江城城域復元図

め若江城への入口は5ヶ所あった。北側では大坂から中小坂村を通過して西よりⅢ郭へ入る口一字・西口が点在(①)、前記の高野街道よりⅣ郭へ入る口一字・東口が点在(②)がある。南側はいづれもⅤ郭へ入るもので、大坂から上小坂村を通過して西より入る口(④)、八尾から西郡村中ノ辻を通過して南より入る口(④)、高野街道より入る口(⑤)がある。これらの入口を見て共通するのは城に入った所に寺が存在することである。絵図には真宗道場を含めて13の寺がある。これらの寺は妙覚寺以外、その創建年代は不詳であり、現存しないものもある。しかし中世から近世に亘る時期、村において寺は大きな役割を果たしており、かなりの寺が15・16世紀に存在していたと考えられる。上記の入口との関係を見ると

- ①. 大坂より中小坂村を経てⅢ郭への入口—薬師寺・信行寺
- ②. 高野街道からⅣ郭への入口—長寿寺
- ③. 大坂より上小坂村を経てⅤ郭への入口—光源寺
- ④. 八尾から西郡村を経てⅤ郭への入口
- ⑤. 高野街道からⅤ郭への入口

—良法寺

となる。寺は当時の人家とは異なり、瓦葺き建物で土塀をめぐらした堅固な造りをしていただけと考えられ、単に信仰の対称としてだけで建てられたのではなく、城内での砦(?)—防御施設としての役割を果たしていたと思われる。絵図を見てもそれぞれの寺が1面ないし2面、堀に面していることからもうかがえる。

このようなことから若江城は①四方を川・湿地帯に囲まれた微高地に位置し、②十三街道が通り高野街道に接した交通の要衝の地にあり、③周囲に堀をめぐらし、④内部を5郭に区分し、⑤郭内の要所に防御施設を兼ねた寺を配した強固な平城であったと言える。若江は室町時代前期以来、河内の政治的中心地(守護所)⁽²²⁾であったことから、城の形態は中世城館から発達した城郭の様相を呈し、いわゆる近世城郭にはならずして廃絶している。このことは主郭であるⅠ郭が方形をなして館の形態を残しており、それを取り囲むようにして城郭が形成されていることからもうかがえよう。

以上、16世紀後半の城の状態について述べてきたが、14世紀末から15世紀に亘る畠山—遊佐時代の形態については若干異なり、さらに考察が必要であろう。Ⅰ郭を画する南の堀(堀1)が16世紀後半のものであり、その南にほぼ平行して15世紀代の溝を検出している。同東の堀(堀2)は16世紀後半、堀東肩を形成している土塁が15世紀後半～16世紀前半に構築され、その下部から15世紀前半の溝を検出している。このように15世紀代にもⅠ郭部分を画する溝があったと思われ、畠山—遊佐時代の城もこの区域を中心にしていたと考えられる。しかし、この時期の明白な遺構は少なく、その形態は不詳といわざるを得ず、今後の課題⁽²³⁾としていたい。

注 (1). 板東史城「若江城」『河内文化』第10～13号 1964年などがある。

(2). 原田修・阿部嗣治・吉村博恵「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報 1983年度』財団法人東大阪市文化財協会 1984年

(3). 上若江村中央にある道場(字垣内)については未確認。『若江村郷土誌』(片岡英宗 巨摩峰春 編 1918

年2月写稿本)によると真宗本願寺派末寺の寺として「願生寺」が記されている。しかしこの寺は字高畑にあったとあり、先の道場と一致しない。また、『大阪府全志』(井上正雄 1922年)、『中河内郡誌』(片岡英宗 1922年)などによると、字寺垣内に、「若王寺」・「光蓮寺」があったと記されており、両寺は同じ寺(大正村の若江山光蓮寺の支院とある)で、光蓮寺は天文年間(1532～1554)に建てられた真宗(大阪府全志)、天台宗(中河内郡誌)の寺である。光源寺との関係は不詳。

- (4). 絵図の分類については『藤井寺市文化財第5号 近世の絵図』(藤井寺市史編さん室 1984年)を参照した。
- (5). 井上正雄 『大阪府全志』巻之四
- (6). 片岡英宗 巨摩峰春 編 『若江村郷土誌』
- (7). 棚橋利光 『河内萱振城—萱振環濠集落—』 城と陣屋シリーズ152号 日本古城友の会 1983年
- (8). 三田浄久 『河内鑑名所記』巻六 延宝7年(1679)
- (9). 片岡英宗 『中河内郡誌』 山下信太郎 高橋萬次郎 『大阪府史跡名勝天然記念物』第三冊 中河内郡に記載されている。
- (10). 木村重成については荻田昭次氏の教示を得た。
- (11). この調査は(財)東大阪市文化財協会が(株)国際航業に委託して1986年6月11日から8月20日にかけて実施したものである。
- (12). 勝田邦夫 「若江城の遺構・遺物」 『東大阪市文化財協会ニュース』2—3 財団法人東大阪市文化財協会 1987年
阿部嗣治 「考古学より見たる若江城」 『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 本文編』 東大阪市遺跡保護調査会 1982年
- (13). 一志茂樹 「城館址の形態とその踏史的考察」 『地方史の道』 信濃史学会 1976年
- (14). 桑原公徳 「中世城郭の復原—山城国勝竜寺城を中心に—」 『地籍図』 学生社 1976年
小和田哲男 「地名・地籍図による城館の復原」 『静岡県の中世城館跡』 1981年
- (15). 川中誠三・湯村平三氏らがおこなっておられた。
- (16). 湯村平三氏の研究資料は御子息・湯村正夫氏の許可を得て参考にした。
- (17). 『大阪府誌』(1903年)に「天守下と字せる畑地あり」、『大阪府全志』に「大字上若江字エンマンジ」と記されているが、今回確認することはできなかった。
- (18). 宣教師がローマへ送った書翰に記されている。たとえば1577年9月19日=天正5年8月8日付臼杵発パードレ=ルイスフロイスの書翰に「第四はシメアン池田丹後殿と称し河内国若江といふ大なる城の部将たる高貴なる武士なり。同所には昨年好き会堂を建築せり」(『耶穌会士日本通信』 森田恭二「文献より見たる若江城」 『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 本文編』より)とある。
- (19). 勝田邦夫 上野利明 松田順一郎 阿部嗣治 「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」 『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』 東大阪市遺跡保護調査会 1981年
- (20). 森田恭二 前掲。
- (21). 『群書類従』第20輯合戦部。『長祿記』には「四方ハ深田ニテロニツニシテ所々ヲ堀切テ、揆橋・櫓・木戸・逆茂木思ノ儘ニ拵ヘテ」(『室町軍記総覧』 古典遺産の会 明治書院 1985年)とある。
- (22). 今谷明 「畿内近国における守護所の分立」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 8集 1985年(『守護領国支配機構の研究』 法政大学出版局 1986年)
- (23). 若江城については『東大阪市文化財協会ニュース』2—3に特集号が組まれており、参照されたい。

V. 若江遺跡出土の漆喰様物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田 博 幸 井村 由 美

昭和57年度の府道大阪東大阪線改良工事に伴う若江遺跡の発掘調査（昭和58年3月4日～同年3月31日）において、中世の若江城の堀の遺構と考えられる溝の埋土中より、瓦などととともに漆喰様物質がわずかに出土し、採集された。

今回、この漆喰様物質の化学分析を依頼されたので、筆者らの常法⁽¹⁾とする「古代漆喰分析法」を適用して、一連の化学分析を行い、結果を得たので報告する。

漆喰試料の採取と外観および予備分析実験

試料：若江遺跡の昭和57年度調査区の第6層、「暗灰褐色土」中の石の下から、木質様物体による圧迫痕をつけて彎曲した薄層状（7 cm × 8 cm × 1 mm）で検出されたわずかに黄色を帯びた白色の漆喰様物質片、総量8.5g。

下記の化学分析を実施するに先立って、試料が漆喰か否かの予備実験を行った。すなわち、試料の一微小粒をマイクロガス捕集器にとり10% HCl 1滴を加えたところ、発泡しつつ完全に溶解し、かつ蓋裏のBa(OH)₂の1滴を白濁させたので、試料が漆喰であることは十分推定された。

漆喰試料の化学分析

漆喰の主成分は石灰岩あるいは貝殻を焼いて得られる炭酸カルシウムを含む水酸化カルシウムCa(OH)₂である。これにときに粘土、砂（無機質）や布、^{すき}苧（有機物）などを加えて、水や米のとき汁、あるいは、ふのりの煮汁で練って使用する。漆喰中のCa(OH)₂は長期間空気に曝されるとCaCO₃に変化するから、結局、漆喰のCaCO₃含量%、熱灼減量%、酸不溶性成分%の3つの分析結果を比較すれば、原料純度、有機質、熱分解成分などの混在の可能性、土砂添加の有無などが推定され、また、これら3値の近似は材料、手法の類似を示唆する。

以上の点から、われわれの一人安田は、高松塚古墳の漆喰をはじめとする古墳漆喰の分析にあたり、つぎのような一連の操作により、漆喰の性状にかかわる分析値を能率よく求める方法を案出して、適用してきたが、今回の試料の分析においてもそれを準用した。その操作は、つぎの通りである。

操作A： 分析に適した試料部分を選別し、付着した汚れは削りとったりして除き、乳ばちで粉碎して均一な試料粉末としたのち、120℃で2時間乾燥する。この中から約0.5gを小ルツボ中に精密にはかりとり、マッフル内で850℃以上で1時間強熱する。デシケータ中で放冷したのち、ルツボ内に残留する酸化カルシウムCaOを主体とする残留物を秤量する。熱灼前後の秤量値の差から熱灼減量が知られるので、最初の試料秤量値との比から熱灼減量%が算出される。

純CaCO₃ならば43.97%となるはずであるが、これよりずれるのは、不純物、土壌成分物質、有機物などの混在の結果と考えられる。

操作B： 操作Aで得られたルツボ内の熱灼残分を蒸留水少量でうるおしたあと、5 mlの濃塩酸と1～2滴の濃硝酸を加えて溶解させる。内容をビーカーへ移し、一たんゆるやかに加熱したあと10mlの蒸留水を加える。この際、不溶性残分があれば、溶液を遠心分離機にかけて溶液から分離し、蒸留水で洗ったのち乾燥して秤量する。この重量から試料中の酸不溶性成分(ケイ酸塩類)含量%の算出ができる。この値は漆喰への土砂の混入に関係がある。

操作C： 操作Bの不溶性残分から分けた酸性溶液と酸不溶性残分を洗った液とを合し、アンモニア水を加えて、リトマス・アルカリ性としたのち、シュウ酸アンモニウム試液を加えてシュウ酸カルシウムの白色沈殿を析出させる。溶液を70～80℃で1時間加熱してから、沈殿をろ紙上に濾しわけ蒸留水で充分洗浄後、ろ紙の底を破って100mlの熱水で沈殿を下のビーカーの中に洗いおとし、ついで硫酸(1+1)30mlをろ紙上に注いで同じく洗いおとす。ビーカーを加熱してビーカーの中の沈殿を溶解させたのち内容を200mlのメスフラスコに移し、蒸留水を加えて正確に200mlとし、これをカルシウム定量用の試料検液とする。検液20mlを正確にとり、蒸留水30mlおよび上記硫酸5mlを加え、60～70℃を保ちながら0.1規定過マンガン酸カリウム溶液で微紅色を呈するまで滴定する。消費された0.1規定過マンガン酸カリウム溶液量はシュウ酸カルシウムのシュウ酸と当量であるから、これから対応するCaCO₃量が算出され、試料採取量との比から漆喰中のCaCO₃含量%が算出される。この%が漆喰の純度%に相当する。

原子吸光分析による微量成分の定量

漆喰中の少量ないし微量成分としては、マグネシウム(Mg)と鉄(Fe)が考えられる。これらの含量の値も漆喰原料の比較にあたって、一つの指標となると考えられる。これらの成分の能率的な定量分析法としては、原子吸光分析法を適用した。方法は、操作Aの項で調製した試料粉末約100mgを精密にはかりとり、0.4規定硝酸を加えて溶かし、全量を正確に50mlとしたものを試料原液とする。この原液から各分析目的金属に応じた測定試料溶液を調製し、これを原子吸光分析装置にかけて、測定成分元素(Mg, Fe, Pb)の標準濃度対吸光度の検量線を作製し、これと対照させて測定試料溶液中の各成分の含量%を算出する。なお、Pb(鉛)について値を求めたのは、かつて高松塚石槨内壁や東明神古墳石槨床面の漆喰に異例の高含量のPbが含まれていた例があるので、それとの対比をみるためである。機器は日立180-60型原子吸光光度計と日立056型桌上記録計を使用した。測定条件を第2表に示す。

第2表 原子吸光光度計の測定条件

分析金属	ランプ (HLA-3型)	燃 焼 ガ ス	ランプ電流 (mA)	使用光の波長(mm)
Mg	Mg 専用	空気-アセチレン	7.5	285.4
Fe	Fe 専用	〃	10.0	248.8
Pb	Pb 専用	〃	7.5	283.7

分析結果

以上の実験の結果、若江遺跡出土の漆喰試料について得られた熱灼減量%、酸不溶性成分%、CaCO₃含量%、Mg含量%、Fe含量%、Pb含量%を一括表示すれば、第3表のとおりである。

第3表 若江遺跡出土の漆喰試料の分析値

	熱灼減量 (%)	酸不溶性成分 (%)	CaCO ₃ (%)	Mg (%)	Fe (%)	Pb (%)
若江遺跡出土漆喰	42.32	0.119	90.92	0.093	1.54	<0.01

考察

上記の結果より、若江遺跡昭和57年度調査区内の堀の第6層より出土した漆喰様物質薄片は、CaCO₃含量が90.92%を示すことから、良質の漆喰であったと判断される。試料は土中に埋蔵中、土壤汚染のためにわずかに黄色化したものと考えられるものの、内部になお純白部分が残ったことは、漆喰の防水的性質がはたらいたものといえる。

試料遺物の出土層が中世の堀遺構に相当するものとすれば、この漆喰片はかつて城壁面に塗布されたものの一片かも知れず、今後の諸調査の結果に期待したい。

なお、参考までに、かつて筆者らが行った明石城出土漆喰の分析値⁽²⁾を第4表に掲げる。

第4表 明石城出土の漆喰試料の分析値

	熱灼減量 (%)	酸不溶性成分 (%)	CaCO ₃ (%)	Mg (%)	Fe (%)
明石城文櫓跡出土漆喰	42.64	2.59	93.32	0.075	0.079
明石城二ノ丸石段横採取漆喰	43.96	0.80	95.52	0.039	0.049
明石城東ノ丸帯郭城壁跡採取漆喰	42.17	2.94	92.59	0.094	0.092

注 (1). 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』吉川弘文館 (1986)

(2). 安田博幸・青園泰子：「明石城遺構出土の漆喰の化学分析」『明石城 兵庫県文化財調査報告 第24冊』兵庫県教育委員会 (1984)

VI. まとめ

今回の報告について、遺構・遺物・城域復元に分け、問題点を含めて記しておきたい。

遺構 今回の調査においては若江城の中核(I郭一本丸)を画する16世紀後半の東西に延びる堀の一部と、16世紀中葉の整地層、15世紀後半から16世紀前半の溝2条を確認した。

堀は2～3段に落ち、底面はフラットであり、調査地内で幅5m、深さ1.6mを測った。これまでの調査結果などから堀幅は10mを越えるものと考えられる。この堀は16世紀中葉の整地層から掘り込まれたものであり、三好義継が河内北半国の守護として若江城に居城したときに整地・掘削されたと思われる。堀内は2時期の堆積層と埋土層に分かれる。下部堆積層(第10層)と上部堆積層(第7層)の間に炭・焼木片・小礫を含む混土層(第8・9層)があることから、第10層は三好義継時代の堆積層、第8・9層は義継が織田信長により攻め滅ぼされたときの埋土層、第7層は池田丹後守教正が城主として居城した時期ごろの堆積層であり、第5・6層が廃城(1781年ごろ)の埋土層と考えたい。

溝は出土遺物などから15世紀後半に掘られたものである。一部2段に落ち、調査地内で幅1.8m、深さ0.4mを測る。削平および削取(整地・堀などによって)されており、その規模および性格は不明であるが、15世紀後半から16世紀前半の城に伴うものと考えられる。

遺物 出土遺物は土師器・瓦・瓦器・磁器・陶器・木製品などがあつた。この中でも土師器皿は瓦に次いで出土数が多く、前述したようにこれまで型式編年がいくつか試みられている。今回も出土資料を白色系と褐色系に分けて型式分類(第1表)をおこなった。実年代を与えることは難しいが、I・J型式は16世紀後半、H型式は16世紀中葉、E・F型式は15世紀末から16世紀前半ごろに比定できるのではないと思われる。今後、資料の検討を重ね、型式編年の作成を試みたい。

城域復元 このたび、飯田博一氏所蔵の村絵図をもとにして若江城の城域復元を試みた。城は四方に河川が走り、深田一湿地帯に囲まれた微高地に築かれていた。とくに16世紀後半の城はI郭(本丸)とII郭(二の丸)を中心に南北760m、東西630～370mの5郭からなる城域をもち、堀などの水路によって区画され、各入口付近には寺を配し防御施設の役割を果たさせていた。このことからその規模は若江城とともに河内の守護所の一つであった高屋城(南北約800m、東西約400m)に匹敵するものであったことが明らかとなった。

I郭は一辺約140mの方形をなし、幅10～16m、深さ2m以上の堀によって画され、瓦を葺いた築地がめぐらされていたと思われる。建造物については礎石・礎石列・柱穴列などを検出しているが、それらの構造・規模はまったく不明である。これまでの調査で壁下地が出土しており、土壁または板壁のものが多かったと思われるが、今回の調査で漆喰を確認し、一部の建物には漆喰を塗布していたと考えられる。

今後、発掘調査、資料の蒐集などを進めて検討を加え、若江城の復元に務めたいと思う。

土師 器 皿 観 察 表

上部遺物包含層

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
1	小皿	白J	8.4		○体部は外反して立ちあがる。 ○口縁部は体部からより外反して立ちあがり、端部をやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
2	小皿	褐K	7.9	1.4	○体部はゆるやかに立ちあがる。 ○口縁部は体部から大きく立ちあがり、端部をやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部内面 ヨコナデ・ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 にぶい黄橙
7	中皿	白I	10.9	1.9	○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部はさらにそって立ち上がり、端部をやや尖らせておさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 浅黄

堀 埋 土

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
4	小皿	白K	7.4	1.5	○体部はゆるい凹面の底部から外反してゆっくり立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部は内傾して折り尖らせておさめている。	○口縁部内外面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
5	小皿	褐J	8	1.5	○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部は体部よりさらにおきて立ち上がり、端部をやや尖くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 にぶい褐
6	小皿	白J	8.1	1.85	○体部は凹面の底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部はやや開きぎみに立ち上がり、端部はさらに開いて丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 淡橙
8	中皿	褐C	10.2	1.4	○体部は外反しながらゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は端部をやや立たせて丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ッ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙
9	中皿	褐H	10.8		○体部は内弯ぎみに外反して立ち上がる。 ○口縁部は端部をやや丸くおさめている。	○口縁部内外面・体部内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
10	大皿	白H	13.6	2.8	○体部はやや凹面の底部から外反して大きく立ち上がる。 ○口縁部は肥厚で端部を尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調: 淡黄
11	大皿	褐J	13.4		○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部は少し開きぎみに立ち、端部をやや丸くおさめている。	○口縁端部～体部内面 ヨコナデ ○口縁部 ～ 体部外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 橙
12	大皿	白I	14.3	2.7	○体部は大きく外反しながら立ち上がる。 ○口縁部は大きく開いて端部を尖らせ内側で面をつくりおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ユビオサエののち ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調: 浅黄
13	大皿	褐D	14.1	2.4	○体部は底部より外反して大きく立ち上がる。 ○口縁部、端部はさらに内側ぎみに立ち尖くおわせている。	○口縁～体部内外面 ヨコナデ ○底部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調: にぶい黄橙
14	大皿	褐E	14.6		○体部は底部からゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部がやや大きく立ち、端部を少し尖らせている。	○口縁・体部上部内外面 ヨコナデ ○体部下内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 橙
15	大皿	白I	15		○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部内外面 ユビオサエののち 斜方向にナデ	○胎土: やや粗 ○色調: 灰白
17	皿		14.2		○体部は外反して大きく立ち上がる。 ○口縁部は開きぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめ内側に段を有す。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ 斜方向のヘラミガキ	○胎土: やや粗 ○色調: 橙

堀堆積土

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
46	小皿	白I	7.3		○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部は端部でやや外にひらき、尖らせておさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 灰
47	大皿	白I	11.2		○体部は外反してゆるやかに立ち上がる。 ○口縁端部はやや少しつまみあげて尖らせておさめ、内側に段を有す。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 灰

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
48	大皿	褐C	13.2		○体部は外反ぎみに立ち上がる。 ○口縁端部はやや内傾して四角くおさめている。	○口縁部外内面端部 ヨコナデ ○口縁・体・底部内面 ナデ ○体・底部 外面 ユビオサエ	○胎土 密 ○色調 にぶい褐
49	大皿	褐D	14.4		○体部は外反してゆるやかに立ち上がる。 ○口縁端部は不定形であるがやや尖らせておさめている。	○口縁～底部外面 ユビオサエ 内面 不明	○胎土 密 ○色調 にぶい褐
50	大皿	褐G	16.2		○体部は凹面の底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部は端部でやや外開いて丸くおさめ内部に段を有す。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 やや粗 ○色調 にぶい橙
51	大皿	褐H	17.2		○体部は底部よりゆるやかに外反して立ち上がる。 ○口縁部は体部との間に段を有し強く立ち上がり端部をやや尖くおさめている。	○口縁部 外面 ヨコナデ 。 端部内面 ヨコナデ ○口縁部・体部内面 ユビオサエ ○体部外面 ユビオサエ	○胎土 やや粗 ○色調 にぶい黄橙
52	大皿	褐I	17.8		○体部はゆるやかな凸面の底部よりするどく立ち上がる。 ○口縁部は外に開き端部を丸くおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底部 外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙

整 地 層

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
77	小皿	褐C	6	1	○体部は凹面の底部からゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は大きく内湾して内側に折れやや尖る。	○口縁部 ヨコナデ ○底部・体部内面 ナデ 外面 ユビオサエののち 体部かるいナデ	○胎土 やや粗 ○色調 にぶい橙
78	小皿	白D	8	1.3	○体部は平らな底面からゆるやかに立ち上がる。 ○口縁端部は内傾して丸くおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底 部 外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 やや粗 ○色調 灰白
79	小皿	白H	7.4	2	○体部は凹面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部は内傾して折り尖らせておさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○体 部 内面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
80	小皿	褐E	8	1.9	○体部はゆるやかな凹面の底部よりやや内湾しながら立ち上がる。 ○口縁部は体部との間に段を有してより開いて立ち端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
81	小皿	褐G	7.6	1.9	○体部は凹面の底部より外反しながら立ち上がる。 ○口縁部はさらに少しだけ立ち、端部を丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調 橙
82	小皿	褐H	8	1.6	○体部は凹面の底部より外反しながら立ち上がる。 ○口縁部は少し内傾ぎみに立ち上がり、端部をやや尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙
83	小皿	白H	8	1.7	○体部は凹面をもち、底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
84	小皿	褐H	8.4		○体部は外反しながら立ち上がる。 ○口縁部はごくゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調 橙
85	小皿	褐E	8.4	1.55	○体部は凹面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○底 部 内面 ナデ ○体 部 内面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙
86	小皿	褐H	8.4	1.8	○体部は凹面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部 外面 ナデ 内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙
87	小皿	褐H	8.4	1.8	○体部は凹面の底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部は少し内側にむきながら立ち、端部を丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調 橙
88	小皿	白G	8.6		○体部は底部よりゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は体部より外反しながら立ち上がり、端部は内側に少し折れてやや尖る。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: やや粗 ○色調 浅黄
89	中皿	褐C	9.2	1.6	○体部は外反しながら立ち上がる。 ○口縁部は体部よりゆるい段を有し外反して立ち、端部をやや尖らせて丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○体 部 内面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ	○胎土: やや粗 ○色調 にぶい橙
90	小皿	白G	8.8	2.6	○体部はほんの少し凹面の底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部はさらに開いて端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調 灰白

番号	器形	型式	法 尺 cm		形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	器高			
91	中皿	褐H	9.1	2.1	○体部は外反ぎみに立ち上がる。 ○口縁部は端部が内反してやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙
92	中皿	白H	9.2	2.35	○体部はゆるい凹面の底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部は肥厚させてやや丸くおさめている。	○口縁部内外面・体部内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○底部内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 灰白
93	中皿	白H	9.3	1.95	○体部は凹面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部は肥厚して体部より少し開きぎみに立ち上がり、端部はやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
94	中皿	褐H	10	1.5	○体部は凹面をもつ底部より外反しながら立ち上がる。 ○口縁部はやや内傾ぎみに立ち、端部をやや尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 かるいナデ	○胎土 密 ○色調 橙
95	中皿	褐H	11.8	1.95	○体部は深い凹面をもつ底面より外反して立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部内面 ヨコナデ ○底部内面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土 やや粗 ○色調 にぶい橙
96	中皿	白F	10.2	2.1	○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部 外面 ナデ 内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
97	中皿	白H	10	2.35	○体部はゆるやかな凹面をもつ底部より外反して立ち上がる。 ○口縁部はさらに少し開きぎみに立ち、端部をやや丸くおさめている。	○口縁部内外面・体部内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○底部内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
98	中皿	褐H	10	1.8	○体部は外反しながら立ち上がる。 ○口縁部はごくゆるい段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙
99	中皿	褐G	10.4		○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁部は体部との間に低い凸を有し、端部近くでより立って尖らせておさめている。	○口縁部外面2回 ヨコナデ ○体部外面 ユビオサエ ○内面磨減していて不明	○胎土 密 ○色調 淡橙
100	中皿	褐H	10	1.7	○体部は外反しながら立ち上がる。 ○口縁端部は若干内傾してやや尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙

番号	器形	型式	法 量 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
101	中皿	白H	11.2	2	○体部は平面の底部から外反してゆっくりに立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかに段を有して体部より立ち上がり、端部を少し開きやや尖らせておさめている。	○口縁部内外面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
102	中皿	白H	11.2	1.7	○体部は外反しながらゆるやかに立ち上がり上部で内弯する。 ○口縁部は段を有して外反して立ち上がり、端部は少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ ○体部内面上部 ユビオサエ ○体部内面下部～底部 ヨコナデ・ナデ	○胎土 やや粗 ○色調 浅黄
103	大皿	白F	12.6		○体部は外反しながら立ち上がる。 ○口縁部は体部との間に段を有し、端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 強いヨコナデ ○体部 外面 ユビオサエののちかるいヨコナデ ○体部 内面 ヨコナデ	○胎土 やや粗 ○色調 灰黄
104	大皿	白F	13.2		○体部はゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は極めてゆるい段を有して端部を尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ	○胎土 やや粗 ○色調 灰白
105	大皿	白G	14		○体部は底部より外反して立ち上部で内弯する。 ○口縁部は体部より内傾ぎみに立ち上がり、端部を尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土 やや粗 ○色調 灰白
106	大皿	白H	14		○体部は外反しながらゆるやかに立ち上がる。 ○口縁端部はやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 灰白
107	大皿	白H	7.9	2.2	○体部は凹面の底部より内弯ぎみに外反して立ち上がる。 ○口縁部は体部より少し内傾し、端部を尖くおさめる。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土 密 ○色調 灰白
108	大皿	褐E	14.5	2.25	○体部は凹面の底部よりゆるやかに大きく外反して立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖りぎみに丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 内面 ヨコナデ ○底 部 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土 密 ○色調 にぶい橙
109	大皿	白H	14		○体部は外反して立ち、中部で内弯してさらに大きく反って立ち上がる。 ○口縁部はふくらみをもち、端部は少し尖らせている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄
110	大皿	白H	15		○体部はゆるやかに大きく外反して立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖らせて丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエののちかるいナデ 内面 ヨコナデ	○胎土 密 ○色調 浅黄

溝埋土

番号	器形	型式	法量 cm		形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	器高			
134	小皿	白E	8.2	2	○体部は平面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部内外面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
135	小皿	白E	8.4	1.5	○凹面の底部からやや外弯ぎみに体部は立ち上がり段を有して口縁部に至る。 ○口縁端部はやや丸みをもって尖り内側に少し折れている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
136	小皿	褐D	8.4	1.2	○体部はゆるやかに立ち上がる。 ○口縁端部を丸くおさめている。 ○底部は広く平らである。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部 内面 ナデ ○底部 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調 橙
137	小皿	白E	8.1	2.1	○体部はほんの少し丸みを持った底部より外弯しながら立ち上がる。 ○口縁は少し外反し尖くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエののち かるいナデ 内面 ユビオサエののち かるいナデ	○胎土: 密 ○色調 にぶい黄
138	小皿	白E	8.4	1.5	○凹面と思われる底部から体部はやや外弯ぎみに立ち上がり、段を有して口縁部に至る。 ○口縁端部は尖っている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 にぶい橙
139	小皿	褐E	8.6	1.7	○全体に不定形(粗雑) ○体部は凹面の底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部は一段を有して大きく立ち、端部をやや丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体部 内面 ヨコナデ ○底部 内面 ナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調 にぶい橙
140	小皿	褐D	7.4	1.6	○底部は丸みをもってゆっくりと立ち上がる。 ○体部は段を有してやや強く立ち上がる。 ○口縁端部はやや内弯ぎみに立ち丸い。	○口縁部内外面 やや強いヨコナデ ○底部 外面 ユビオサエののち 一部ゆるいナデ 内面 ナデ?(磨耗)	○胎土: やや粗 ○色調 橙
141	小皿	褐E	8.1	1.8	○体部は凹面をもつ底部から外反して立ち上がる。 ○口縁部はゆるやかな段を有して体部より立ち上がり、端部を少し尖らせている。	○口縁部 外面 ナデ 内面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 橙
142	中皿	白A	10.1	1.2	○体部は浅凹面からゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は体部との間に強い段を有し、端部は内傾しながら丸くおさまり内側に折れている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエののち ゆるいナデ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調 浅黄
143	中皿	褐F	10	1.8	○体部は凹面の底部から外反ぎみに立ち上がり、途中ゆるやかな段を有す。 ○口縁端部はやや尖く丸くおさめている。	○口縁部 外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエののち ナデ 内面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調 橙

番号	器形	型式	法 尺 cm		形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口 径	器 高			
144	大皿	白C	6.4		○体部はゆるやかに立ち上がり段を有して口縁に至る。 ○口縁端部は丸くおさめ内側に少し折れている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調: にぶい黄 ○体部外面の一部に赤色顔料付着
145	大皿	白F	14.2		○体部はやや外湾しながら立ち上がる。 ○口縁部は体部より段を有して外反して立ち上がり尖っておさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ナデ	○胎土: 密 ○色調: 浅黄
146	大皿	白E	14.2	2.6	○体部はほんの少し凹んだ底部より外反しながらゆるやかに立ち上がる。 ○口縁部は少し開き、端部を丸くおさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 浅黄
147	大皿	褐E	14.5	2.1	○体部は外反して立ち上がる。 ○口縁端部はやや内傾して尖りぎみにおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: やや粗 ○色調: にぶい橙
148	大皿	褐D	14.8	1.8	○体部は平らな底部から外反して立ち上がり段を有す。 ○口縁端部はやや尖らせて丸くおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: 橙 ○口縁端部の一部コゲ
149	大皿	白F	16.6		○体部は底部よりやや内反しながら立ち上がる。 ○口縁部は体部より外反して立ち上がりやや尖っておさめている。	○口縁部内外面 ヨコナデ ○体・底部外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調: 浅黄
150	大皿	白E	19.8	2	○体部は外反して大きく立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ ○底 部 内面 ナデ 外面 ユビオサエ	○胎土: 密 ○色調: にぶい黄
151	大皿	褐B	17.2	2.25	○体部は外反して大きく立ち上がる。 ○口縁端部は面を有し内側に折り四角くおさめている。	○口縁・体部内外面 ヨコナデ	○胎土: 密 ○色調: 橙
152	大皿		21.4		○体部は外反して大きく立ち上がる。 ○口縁部は体部より外反して立ち上がり、端部は内傾して内側に折れ、段をなしている。	○口縁部内外面 強いヨコナデ ○体 部 外面 ユビオサエ 内面 ヨコナデののち放射状のヘラミガキ	○胎土: やや粗 ○色調: 橙

図

版



若江遺跡周辺航空写真（昭和17年ごろ）

図版2
遺構



若江遺跡周辺航空写真（近年）



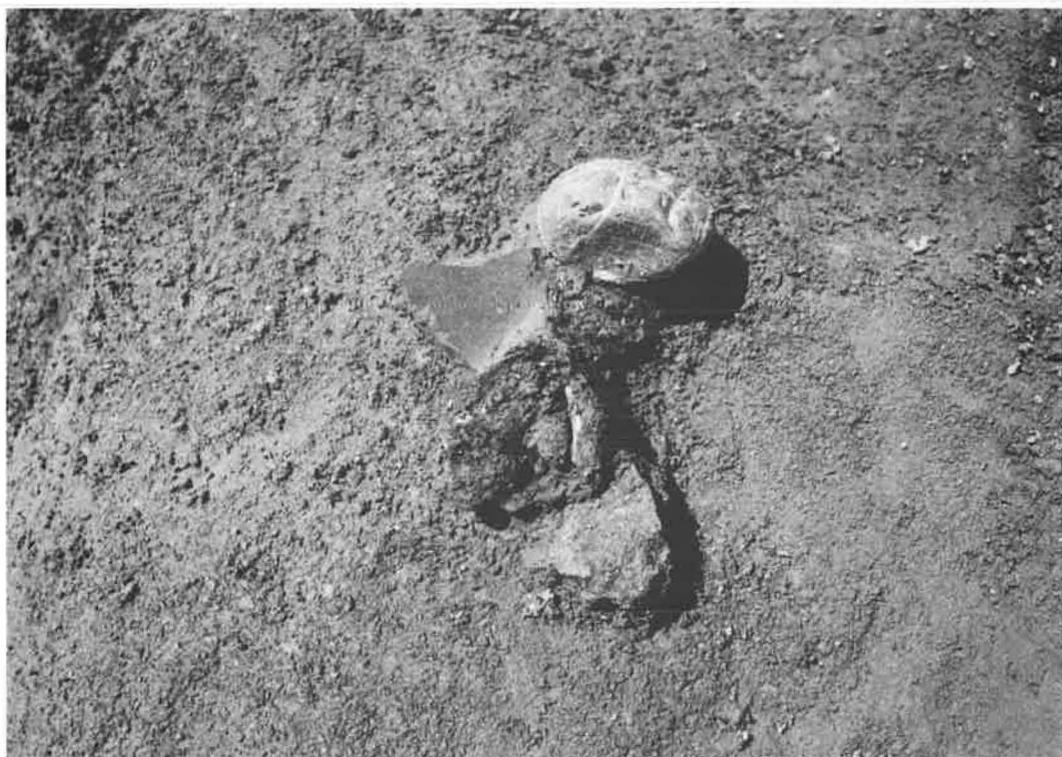
1. 調査作業風景



2. 掘埋土内遺物出土状況(1)



1. 掘埋土内遺物出土状況(2)



2. 掘埋土内 漆喰片・瓦出土状況



1. 堀堆積土内遺物出土状況（全景 東より）



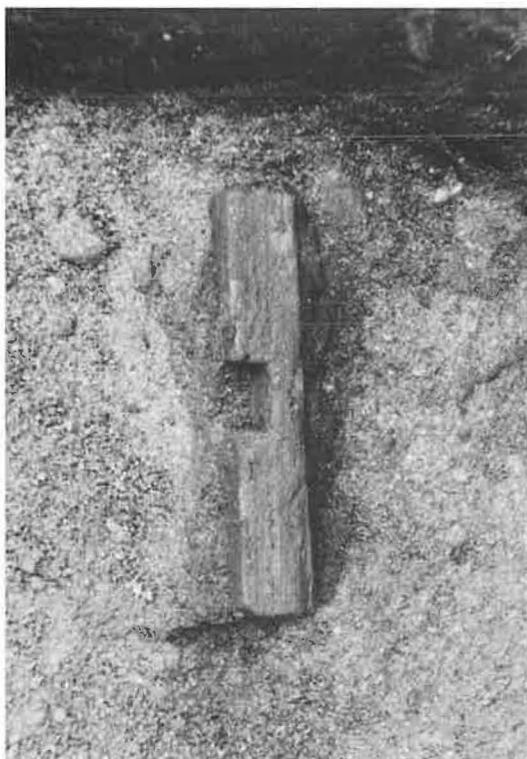
2. 堀堆積土内遺物出土状況（部分1）



3. 堀堆積土内遺物出土状況（部分2）



1. 堀堆積土内木製品出土状況(1)



2. 堀堆積土内木製品出土状況(2)



3. 堀堆積土内木製品出土状況(3)



1. 堀 (東より)



2. 堀 (西より)



1. 溝（東より）



2. 溝（西より）



3. 下部遺物包含層内土器出土状況



1. 東断面



2. 東断面 (部分)

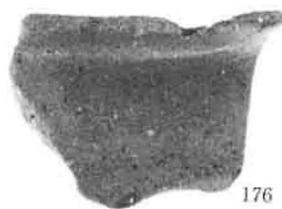
图版
10
遺物



3



173



176



1



171



2



175



179

1. 上部遺物包含層

2. 下部遺物包含層



5



4



9



8



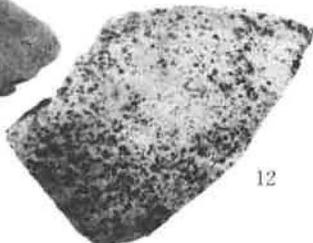
11



14



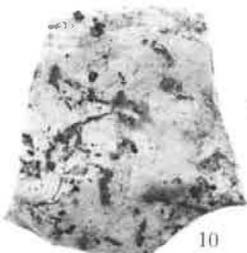
13



12



15



10

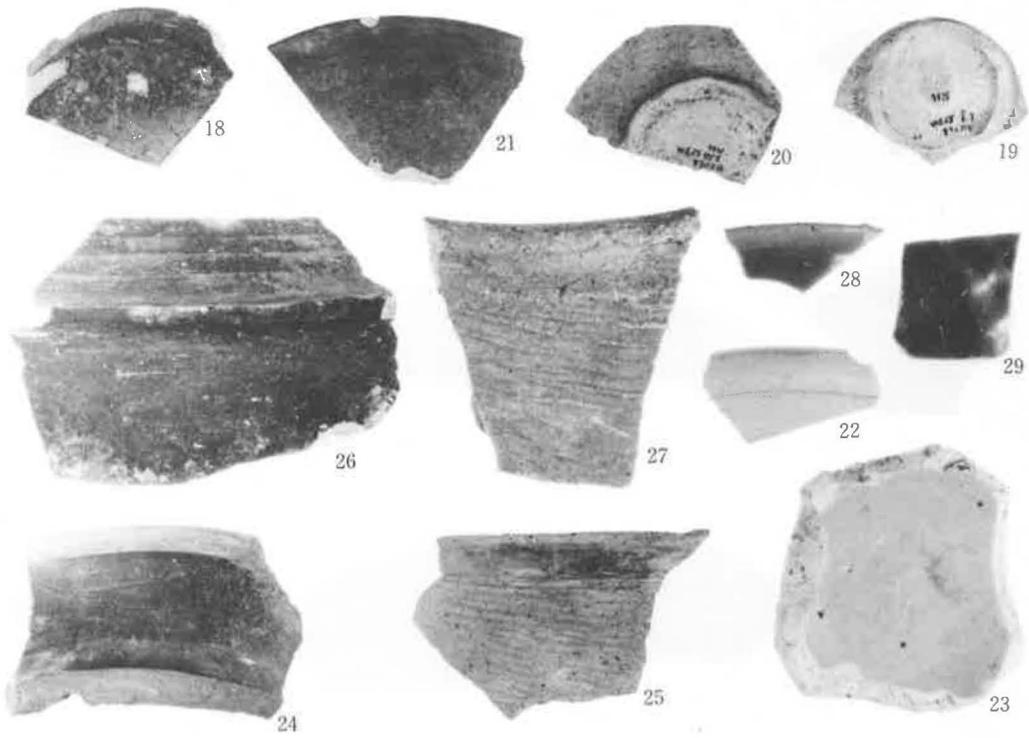


16

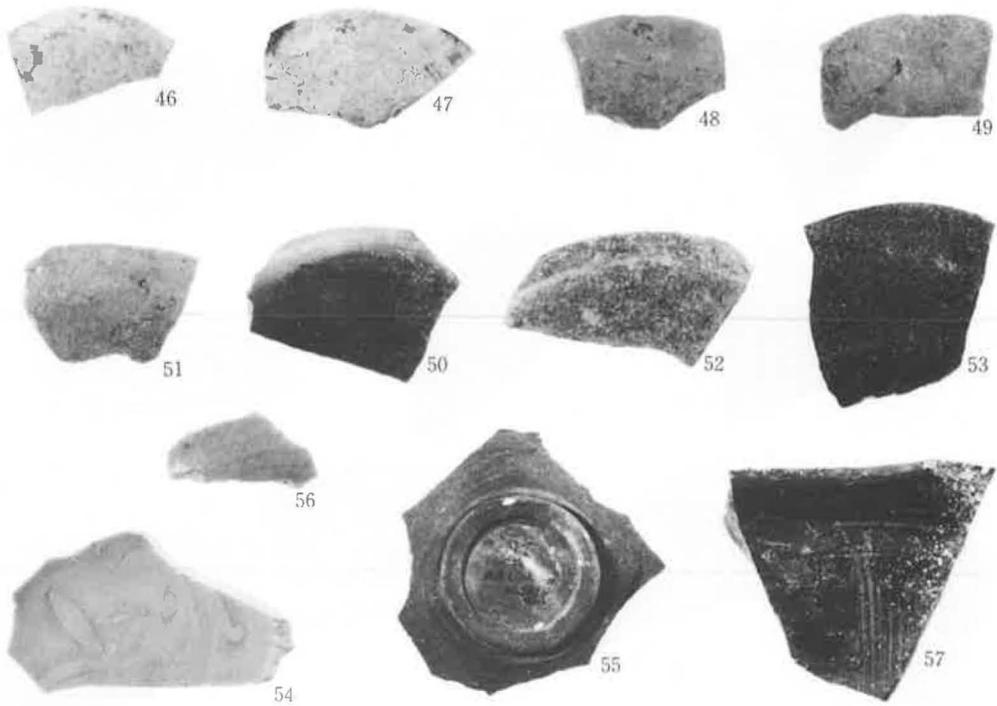


17

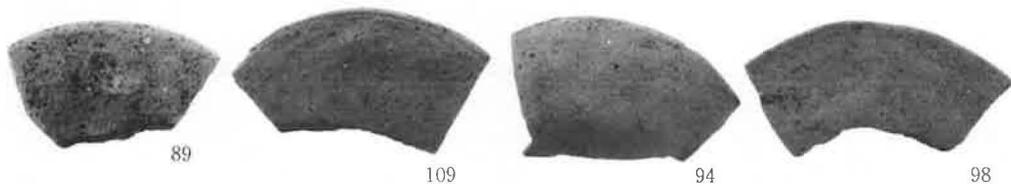
3. 堀埋土(1)



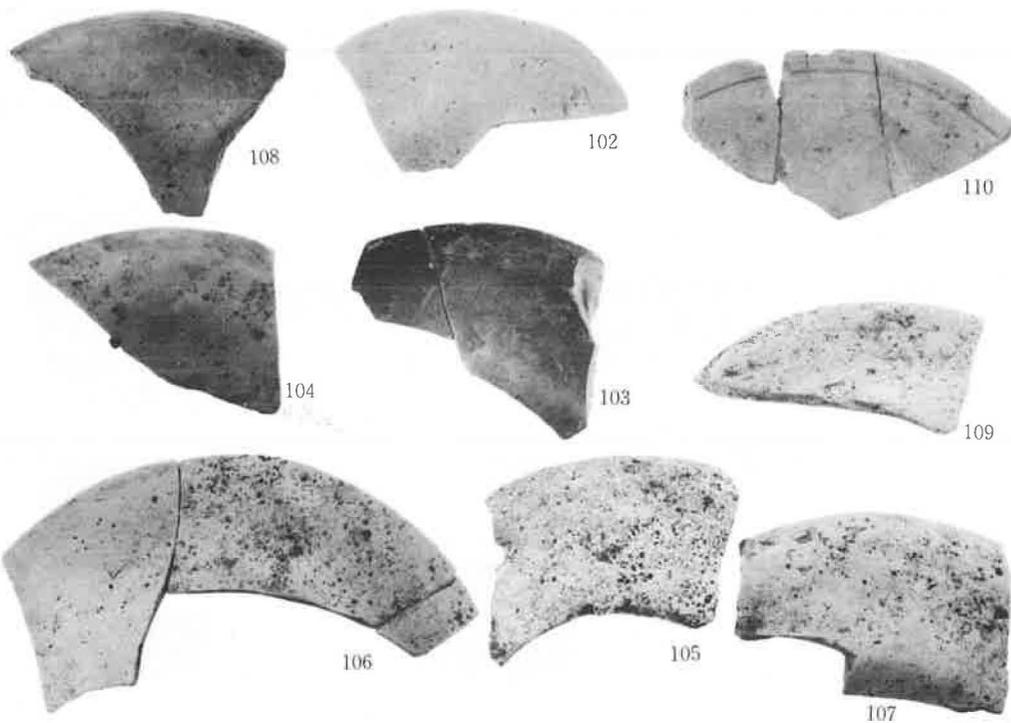
1. 堀埋土(2)



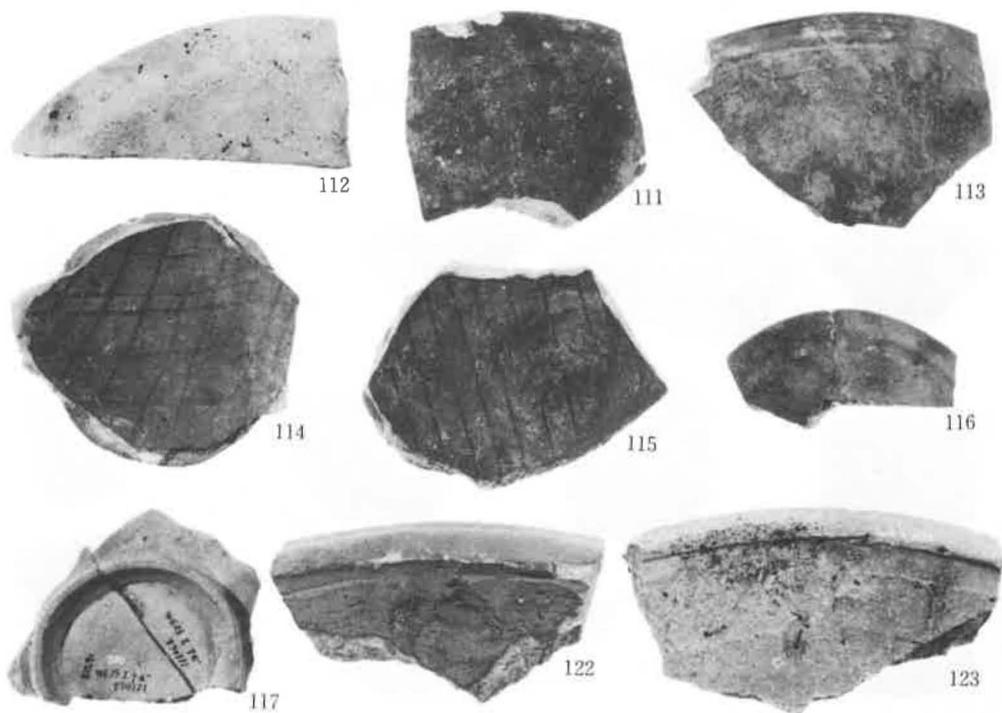
2. 堀堆積土



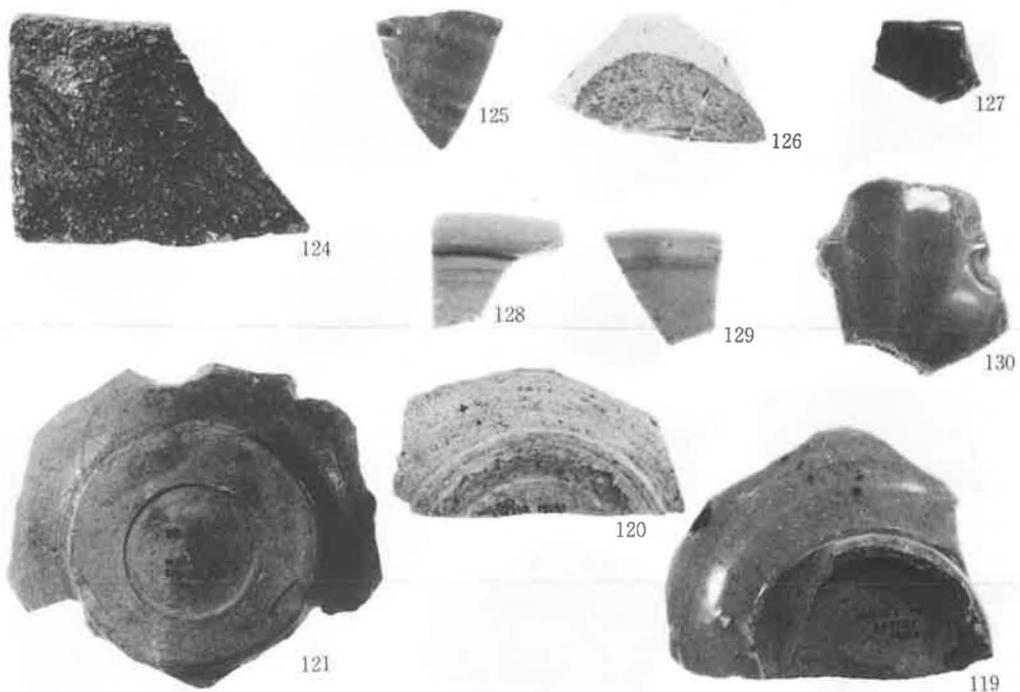
1. 整地層(1)



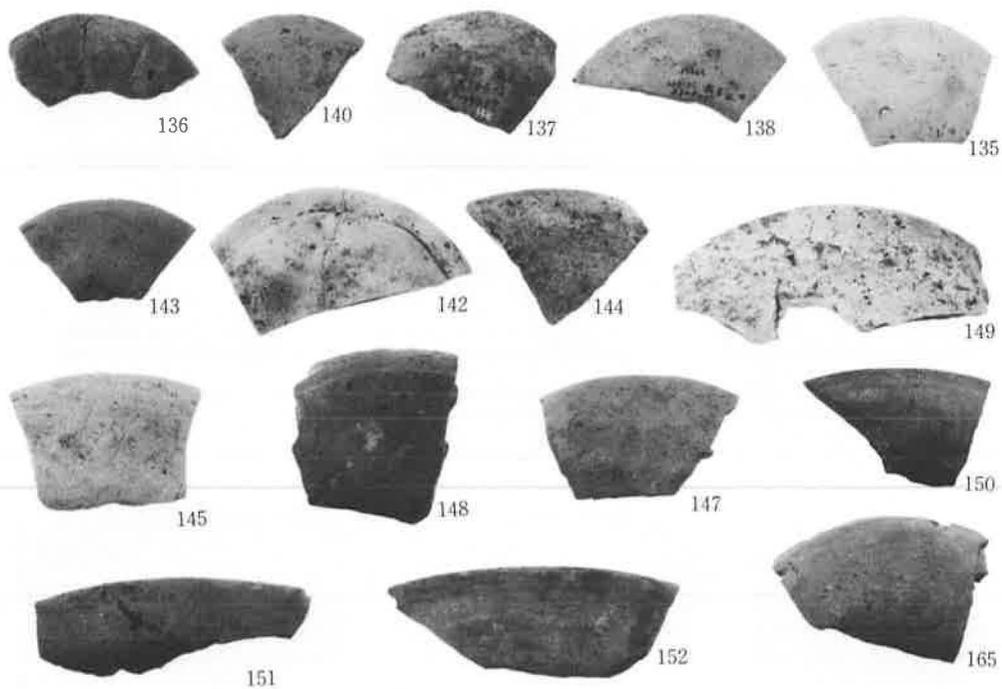
2. 整地層(2)



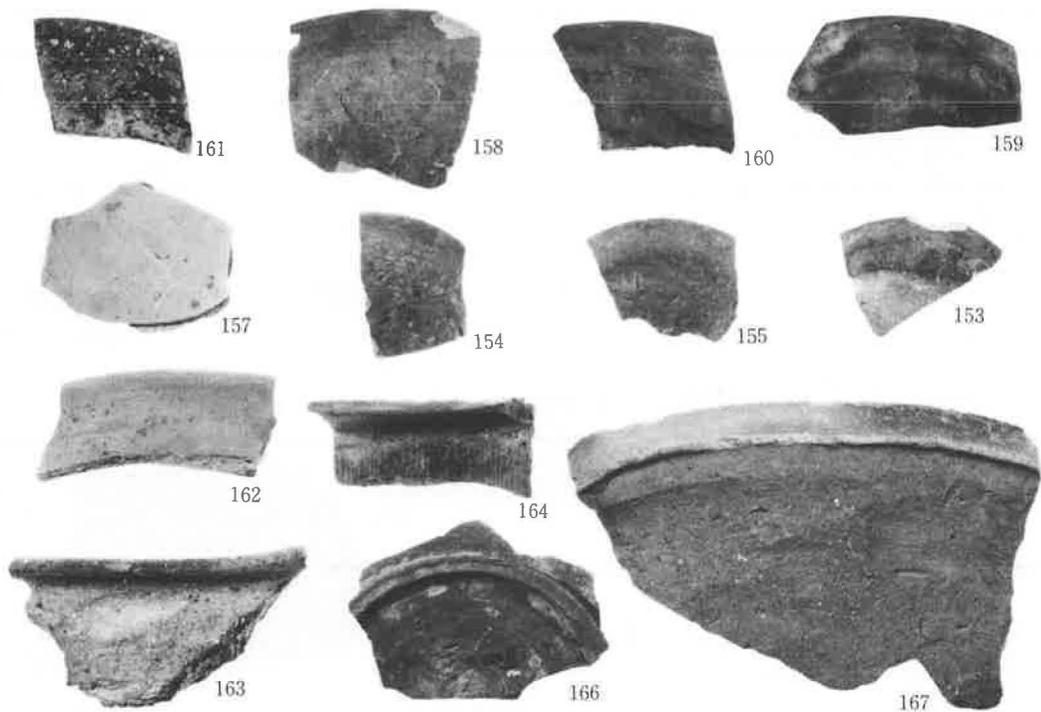
1. 整地層(3)



2. 整地層(4)



1. 溝 埋土(1)



2. 溝 埋土(2)



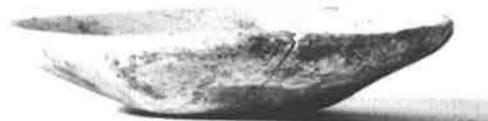
79



92



81



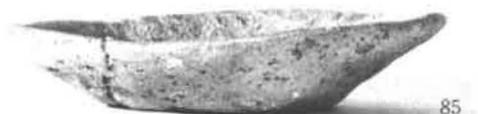
93



83



95



85



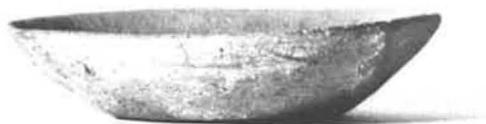
96



86



97



87



101



90



118



6



141



139



134



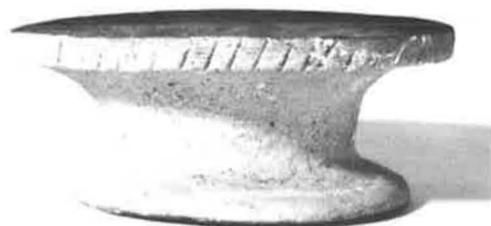
146



156



170



177



172



174



178



60



30



31



169



168



32



33



34

軒丸瓦

圖版
18

遺物



59



37



58



35



36



38



39



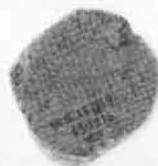
42



43



132



41



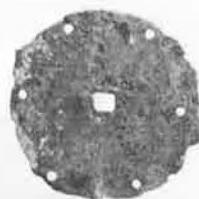
40



131



133



133'



45



45'



44



61



62



61'



62'



61''



62''



71



71'



63



64



65



66



67



68



69



70



72



73



74



75



76

若江遺跡第25次発掘調査報告

1987年 3 月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 明文堂工業株式会社